

昭和七年度

石川縣水產試驗場事業報告

昭和七年度 石川縣水産試驗場事業報告

目次

漁撈部

一、いしなぎ漁場調査	一
二、鯖漁場調査	一
三、鮪延繩漁業試験	五
四、深海漁場調査	二〇
五、定置漁具改良試験	二一
六、海洋調査	三七
七、漁況通信及漁況調査	四三
八、鱒標識放流	四五
九、漁業取締	四六

製造部

一、 鱈水煮罐詰製造試験	四九
二、 フィッシュユミール製造試験	五五
三、 製造講習並に指導	六〇

附 録

一、 昭和七年度決算表	六三
二、 昭和七年度末現在本場員氏名擔任表	六八

以 上

漁

撈

部

一、いしなぎ漁場調査

本事業は四、五月の候舳倉島附近を中心とし、延繩漁具を用ひ約一ヶ月間施行の豫定なりしも、別項記載の如く、試験船白山丸は本期機船底曳網漁業の取締りに従事するの己むなきに至り之を中止せり。

二、鯖漁場調査

一、趣旨

近來春、夏に渉る鯖の來游は逐年漸減し、爲めに沿岸鯖延繩又は流網漁業者の困憊甚しきに至れり。然るに日本海沖合に於ける鯖の棲息は相當豊富なるものにして、從來出漁せざる區域全般に亘り鯖の移動状態を調査し、好漁場を求めて沖合出漁を爲すに於ては、在來期間に於ける漁獲を増加するは勿論漁期の延長をも計り得るものと認めらるを以て、本年度より巾着網に依る試験は全く廢止し、延繩のみを以て先づ大和堆を中心とする漁場につき、其漁獲狀況及時期に依る魚群の移動状態を調査する事とせり。

二、期間

七月一日より同月三十日に至る一ヶ月間

三、方法

本場試験船白山丸（八九噸一六）を母船とし、之に三人乗漁艇三隻を積載し、母船式に依る延繩漁業を行ふ。

四、漁具及餌料

延繩一鉢分の構造左の如し

幹 繩 綿糸二十番手二子撚二十八本子長百尋

枝 糸 綿糸二十番手二子撚十二本子長四尺一鉢につき六十本附とす。

釣 鈎 錫鍍金焼入鐵製丸型七分

浮子 徑二寸五分、長七寸五分、硝子製一鉢に一個宛を附す。

浮子繩 綿糸二十八本子長十尋一鉢に一本宛を附す。

浮標 石油空罐八鉢につき一個を附す。

浮標繩 南京麻二子撚長十尋。

漁具使用數 漁艇一隻につき四〇乃至五〇鉢。

餌料 鹽藏鱈及生鯖。

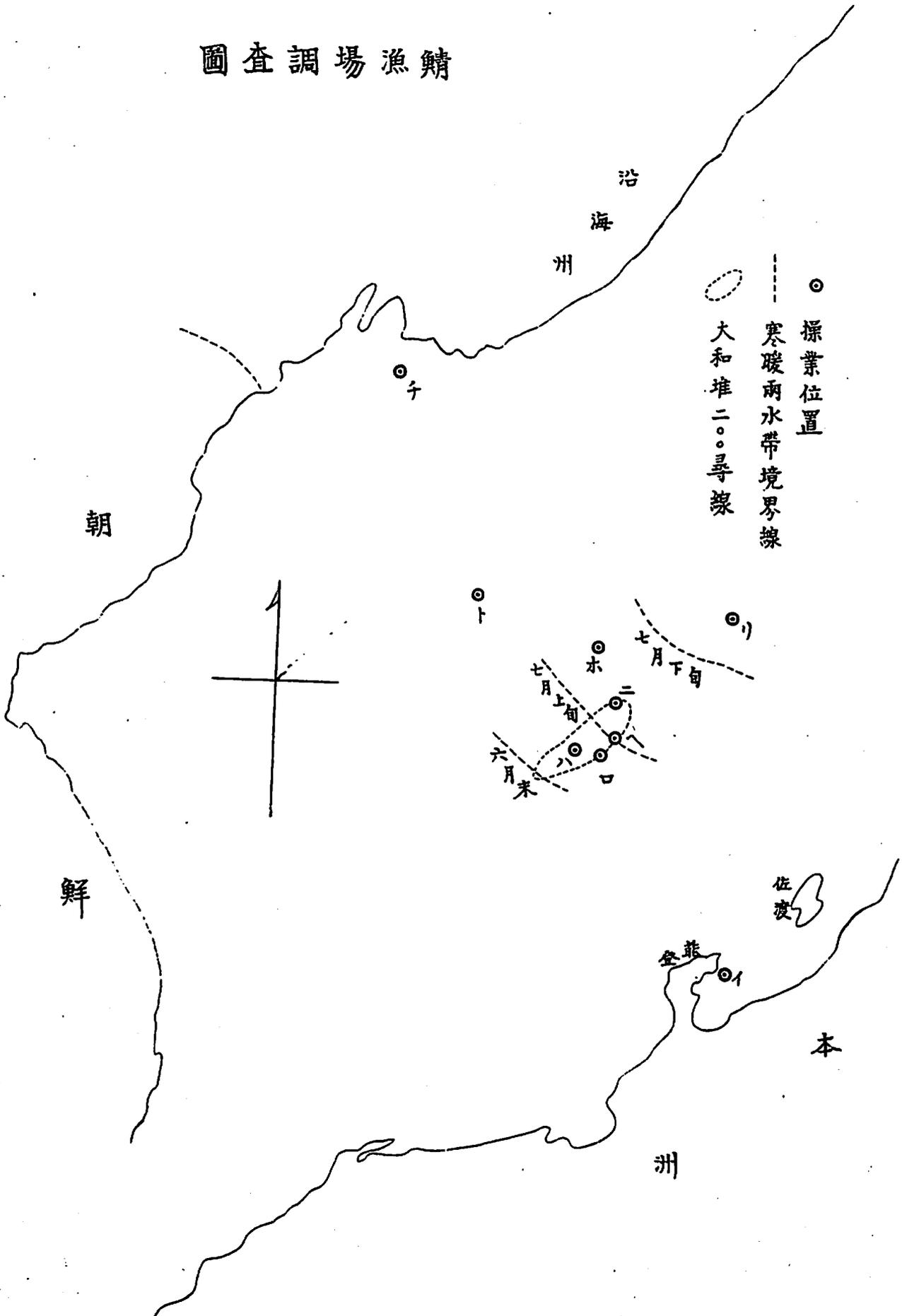
五、經過及結果（日誌及圖參照）

本事業は六月初めより着手の豫定なりしも、他の用務の都合上七月より開始の已むなきに至り、即ち七月一日沿岸漁場の狀況を見る爲め、能登小木沖合八湊にて一回操業せるに、漁獲殆んきなく同月四日大和堆上に至り投繩し一回七百五十尾の漁獲あり、翌五日夫れより西方十湊にて操業せるも、十尋層以下の水温著しく上昇し居り、漁獲三百七十尾に過ぎず、更に附近を調査せるも豫期の水温状態を發見し得ず、超へて十四日稍北方大和堆北部に至り調査せるに依然適水帯を見ず附近二、三十湊間同様にして、二繩にて三百六十二尾を漁獲せるに過ぎず、次航海は二十二日より二十三日に涉り順次北西方に進み對岸近く迄試験せるも、依然適水帯に出會せず不漁に終れり。依つて最終航海には二十九日大和堆より北東方約六十余湊に至れるに、月初めの大和堆上と同様の水帯あり、濃霧に妨げられ僅に漁艇二隻にて百鉢を投繩せしに係らず四百尾の漁獲ありき。

此事實並に従來よりの調査の結果より見るに、日本海沖合の鯖の好漁場は水温に於て、概して表面三十尋深乃至二十尋深との較差著しきを要件とし、其温度は季節に依り一定せざるも、七月前後に於ける場合を例示すれば、表面十八度乃至二十度十尋深、十一度乃至十二度二十尋深にて、七、八度に下るを最も適當とするが如く、斯くの如き状態の水帯は大凡そ次圖の如く南東より北西に伸び、線狀を爲して漸次北東方に移動す。即ち漁場は季節の進むに従ひ漸次日本海中央を北東方に向ひ移動するものにして、本年度の狀態に於ては大和堆は、七月初め迄は前記適水帯に含まるゝも、七月中旬以後は此の水帯は大和堆上を北東方に通過し去れる後なるを以て、漁獲無かりしは當然なりと云ふ得べし。

顧みて本年度調査は出漁期遅れたる關係上漁獲僅少に過ぎざりしも、略日本海沖合の鯖に就き海況と漁況との關係を窺知し得た

鯖魚場調查圖



るは大なる收穫にして、今後の漁場探索上利する處尠ならずと思はる。

調査日誌

月日	漁場符號	漁場位置	水		温		尾數	金額	漁獲率	摘	要
			表面	一〇等	二〇等	尾數					
七月一日	イ	小木ヨリ東ノ南 四分三兩八連	二〇・七度				サ バ 三		〇・三三		荒天休漁
同 二日											
同 三日											宇出津出帆漁場ニ向フ
同 四日	ロ	北緯三九度三分五分 東經一三四度五分	一七・四	一一・一	七・八	サ バ 一七〇	六・七	〇・七二			漁場ニテ漂流ス
同 五日	ハ	北緯三九度七分五分 東經一三四度八分	一八・五	一二・五	一一・〇	サ バ 三〇		〇・四二			宇出津ニ向フ
同 六日											宇出津入港
同 七日											宇出津碇泊
同 八日											同
同 九日											同
同 十日											宇出津出帆漁場ニ向フ
同 十一日											漁場着荒天ノ爲メ舳倉島ニ避難ス
同 十二日											風浪強ク輪島ニ入港ス
同 十三日											輪島出帆漁場ニ向フ
同 十四日	ニ	北緯三九度三分 東經一三四度三分	一七・七	一七・五	二二・〇	サ バ 三六〇 (節ニ使 用)		〇・三三			漁場ニテ漂流ス

同 十五日	ホ	北緯四〇度五分 東經一三度五分	一八・八	一七・三	一〇・三	サ パ 二〇〇	(餌ニ使 用)	〇・七	宇出津ニ向フ
同 十六日									宇出津入港
同 十七日									七尾ニ至リ重油淡水積載
同 十八日									天候不良出帆見合セ
同 十九日									宇出津出帆漁場ニ向フル モ天候悪ク輪島入港
同 二十日									荒天輪島碇泊
同 二十一日									輪島出帆漁場ニ向フ
同 二十二日	へ	北緯三九度三分 東經一五度三分	三三・三	一九・三	一三・五	サ パ 二二		〇・〇	揚繩後北航ス 濃霧來ル
同 二十三日	ト	北緯四〇度三分 東經一五度一分	一九・七	九・九	四・四	サ パ 二〇		〇・三	揚繩後北航ス
同 二十四日	チ	北緯四二度五分 東經一三度七分	一四・五	一〇・六	二・五	ホ サ ツケ ケ 一、七〇〇 三		〇・五 二・八〇	宇出津ニ向フ (スケトウ)
同 二十五日									歸航中
同 二十六日									宇出津入港
同 二十七日									宇出津出帆漁場ニ向フ
同 二十八日			二三・四	一七・四	三・三				漁場着、漂流ス
同 二十九日	リ	北緯四〇度三分 東經一五度七分五秒	二二・五	三三・四	七・〇	サ パ 二〇〇		〇・六七	濃霧來ル、 揚繩後歸途ニ着ク 七尾ニテ重油淡水ヲ積ミ 宇出津入港
同 三十日									

備考

- 一、鯖の大きさは小二百匁大二百五十匁平均二百三十匁なり。
- 二、漁獲率は釣數十に對する漁獲鯖の數を示せり。

三、鯖延繩漁業試験

(一) 趣 旨

本試験は昭和三年度よりの繼續事業にして、沿岸漁業ミ拵格する虞多き機船底曳網漁船其他の大型機船を誘導して、近年頗に盛況を呈せる北海道太平洋面の鯖漁場に進出せしむる目的を以て施行せるものなるが、今年度に於ては特に同漁場の價值決定に力を須ひたり。

(二) 試験船及従業員

汽船白山丸（鋼製ケツチ型八九噸一六、ディーゼル機關二〇〇馬力）

監督一名、及船長以下十八名

(三) 漁具及副漁具

漁具は前年來の物を使用せるも内、使用に堪へざるもの十五鉢を廢棄し、之と同數の新品を補充し總計五十八鉢を用意せり。唯浮子繩は前數ヶ年の經驗に鑑み漁期の初めに長十尋とし、盛漁期以後は五尋に短縮せり。又副漁具は前年通り五馬力モーター付藤田式ラインホーラーを使用せり。

(四) 期 間

昭和七年八月廿八日より同十一月三日に至る六十八日間。

(五) 根 據 地

函館港。

(六) 漁 場

別紙漁場圖に示す如し。北海道襟裳岬より青森縣尻矢岬に至る距岸二、三十哩以内の海區にして、尻矢沖を主とし惠山岬沖合之に次ぐ。

(七) 經過及結果

八月十二日場地出帆翌十三日新潟港着と同時に船體機關修繕に着手し、同月廿七日修繕完了を待つて同地發、廿八日函館に入港し直に出漁準備を整へ、廿九日より出漁せり。詳細は次の試験日誌に譲り、月別に概況を記せば左の如し。八月一航海を爲し、投繩五回なりしも不漁に終り、僅に卅一日襟裳岬より南西二分の一南廿一哩、水温十九度七の点にて鮪二尾を得たり。九月に入りては當方面にて雨天、高浪を招き易き東乃至南の強風多く大に操業日數を減ぜり雖も、漁況は比較的良好にして第一航海に鮪、梶木合せて十三尾、第二航海に鮪十一尾、女梶木四尾等の漁獲あり、下旬に入るや天候の定まるに共に漁場も略一定し、第三航海は鮪十四尾、女梶木九尾其他鯨類の多獲あり、最後の航海には投繩三回にして大鮪廿七尾を揚げたり。十月は上中旬に於て前旬同様好漁を示したるも、下旬に入るや荒天多く漁場も混沌として定まらず、苦心の割合に酬えらるゝ所尠なかりき。初航海は操業五回にして鮪廿三尾、女梶木二尾等を漁獲し、第二航海は投繩二回にて鮪廿三尾、女梶木二尾其他の好漁あり、第三航海は投繩八回にて鮪廿四尾、女梶木一尾等の漁獲となり、稍漁況の下れるを示せり。第四航海は廿一日の朝繩にて大鮪五尾の漁獲ありしも、以後不漁に終り、第五航海は廿四日出帆後操業二回なりしも鮪の影を見ず、依つて青森縣鮫港に入港し一般の漁況を調査せしに、各船共不漁にして漁期の去れるを感じり。函館への歸途更に尻矢岬沖にて一回投繩を試みしに、之亦漁獲皆無に終り、直に函館に入港して數日間碇泊し一般の模様を窺ふに、入港し來る各船、何れも無漁なるより十一月二日切揚に決し翌三日出帆、五日場地に歸着せり。

今年の終漁期の早かりしは、九月初めより太平洋面一帶に寒流の勢力卓越したるに因るものにして、例年九月下旬より月上旬に於て一時好漁を見る。色丹島方面の漁況不振なりしこゝ及襟裳中心の漁場も、惠山及尻矢兩岬側に偏せるによりて察すべし。

八月廿八日函館着、出漁準備の日より十一月二日切揚決定日までの従業日數六十八日、航海數十、一航海の平均日數四日強、其間の操業回數四十一回、内無漁六回なり總漁獲高は左記の通りにして、此水揚高約五千圓、手取金四千三百七十四圓に過ぎ

ざりしも、短期且つ魚價安の際ミしては比較的好結果を擧ぐるを得。函館入港船中の首位を占め、同地魚市場より優漁旗を贈られたり。

鮎 一四〇尾
 女梶木 二〇尾
 金鯛 七尾
 青鮫 二七尾
 六、三八五貫三
 七三二貫二

以上

試験日誌

月日	氣象		水温	漁場符號	漁場位置	操業時間	漁獲物			記
	天氣	風					魚名	數量	金額	
八月二十八日	晴	北								午後一時函館入港出漁準備をなす
同二十九日	同	東	三〇・〇	イ	尻矢岬北東イ東 4/4東ニ	三〇・〇 二〇・〇	メ 金鯛 青サメ	一 一	三・三	午前九時函館發漁場へ向ふ
同三十日	曇	南	二九・〇	ロ	襟裳岬西南西三 ニ	四・〇 三・〇 二・〇	青サメ	一		漁獲なし
同三十一日	晴	北東	二九・七	ニ	襟裳岬南西ニ南 三	三・〇 二・〇 二・〇	鮎 青サメ	三 三	三・三	漁獲なし
同	曇	西	二〇・七	ホ	襟裳岬南々西ニ 三	二・〇 二・〇 二・〇				午前十一時四十五分函館着
九月一日	同	北西								
同二日	雨	南東								前地碇泊
同三日	同	南東								前地碇泊

同 十八日	晴	南東	三											午前三時發函館港外にて主機故障の爲め漂流一先函館へ歸港午後六時函館發漁場へ向ふ
同 十九日	曇	北西	三											天候不良に付き浦河へ避難す午後十一時四十分前地發漁場へ向ふ
同 二十日	同	西	二	一九・三	ワ	浦河南ノ西ノ西	同前	三・五 一〇・〇	大サメ	二				
同 二十一日	曇	西	二	一九・二	ヨ	襟裳岬西ノ南ノ南	同前	三・〇 二〇・〇	大	一				
同 二十二日	同	南	二	一九・七	レ	襟裳岬南西ノ西	同前	二・〇 一〇・〇	大	二				
同 二十三日	同	南東	二	一九・三	ソ	襟裳岬南西ノ西	後	二・〇	掘サメ					揚船後直に餌料等補充の爲函館へ向ふ
同 二十四日	曇	東	三											時化模様にて付前地碇泊
同 二十五日	同	南東	三											同
同 二十六日	小雨	西	二	一七・八	ツ	尻矢岬東ノ北	同後	二・〇 二〇・〇	大	五				午前七時三十分前地發漁場へ向ふ
同 二十七日	晴	北	二	一八・七	ネ	尻矢岬北東ノ東	同前	一〇・〇 三〇・〇	大	三				
同 二十八日	曇	南東	三	一八・九	ナ	尻矢岬南西ノ西	同前	三・〇 二〇・〇	大	一				時化となり函館へ向ふ
											三八・三			
											三五・〇			

同 十三日	同 西 二	一七・七	フ	尻矢岬東ノ南 八淵	前	二〇・〇	青 鮫	一	六〇分	午後九時三十分揚繩中繩切斷、探索せるも發見せず依りて同位置に十字型に十二鉢を投繩翌朝まで漂流す 流失繩の探索に努め午前十時三十分發見せり揚繩後函館へ向ふ 漁獲物の陸揚を爲し前地碇泊
同 十四日	曇 北西 二	一八・五	エ	恵山岬東六淵	後	二〇・〇	大 鮪	八		
同 十五日	晴 南西 二	一七・二	テ	恵山岬東壹淵			大 鮪	五		
同 十六日	雨 東 二	一七・八					大青 鮪鮫	二二		
同 十七日	同 南東 三									
同 十八日	曇 同									
同 十九日	雨 東南東 二									
同 二十日	晴 東 三	一六・七	ア	恵山岬東ノ南 三淵	後	二〇・〇				
同 二十一日	曇 西 三	一七・六	サ	尻矢岬東六淵	前	二〇・〇	大 鮪	五		
同 二十二日	曇 西 三	一七・四	キ	尻矢岬東北東 六淵	後	二〇・〇				
同 二十三日	同 南東 三								重油の補充を爲す 時化模様ニ付碇泊	

同 二十四日	晴	西 二	一七・五	ユ	尻矢岬東南東	同後	三・四〇	青		午前八時漁場へ向ふ
同 二十五日	曇	北西 二	一六・八	メ	襟裳岬南西イ南	同前	九・五〇	金		漁獲なし天候不良に付鮫港へ向ふ午後六時三十分鮫港着碇泊
同 二十六日	晴	西 二					二・三〇			前地碇泊漁況調査を行ふ
同 二十七日	同	同								同
同 二十八日	同	西 一	一七・三	ミ	尻矢岬東尾南	同後	二・三〇			午前八時三十五分前地發漁場へ向ふ漁獲なし午後八時三十分向館へ向ふ
同 二十九日	同	西 三								午前四時三十分函館着碇泊
同 三十日	同	西 一								前地碇泊
同 三十一日	同	北 一								同
十一月一日	雨	西 三								同
同 二日	曇	北東 二								同
同 三日	晴	東 一								歸場命令を受け午後十一時歸途に着く

(八) 結論

本試験は前後五ヶ年に涉りて施行し、其間四年度の如き相当好成绩を示せるに關はらず、遂に民間漁船の追隨者を見ざりしは遺憾なりしも、以後に於ける同方面年々の漁況必ずしも安定せず、且つ從來大型機船の縣外出漁の習慣を缺きし關係上、今日迄單なる試験事業の繼續に終りたるものも推せらるゝも、試験としては略各種の場合を経験し調査せるを以て、今年度限り終了し今後は試験結果の縣内周知及當業者の出漁勸奨に努むることとせり。

左に五ヶ年の試験成績に基く北海道、太平洋面の鮎漁業に對する所見を述べて本項の結びとす。

(1) 漁期

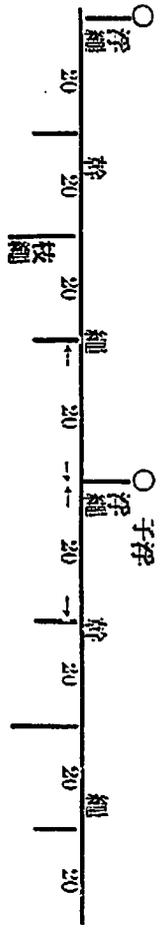
本場の試験期間は大体八月下旬に本縣を出帆し、八月末又は九月上旬中に出漁を開始し、十一月中旬切揚歸縣し、從漁期間二ヶ月半なれども、本漁場に於ける實際の漁期範圍は八月中旬より十二月上旬迄繼續す。尤も十一月以後に漁獲あるは稀にして、昭和二、三年頃延繩又は曳繩に依り時に大漁をなせる船ありたるも、近年は殆んど漁獲を見ず一般的には經費の關係上十一月中旬頃切揚ぐるを得策す。此の漁期中十月上旬擇捉島、色丹島方面に著しく豊漁を見ることあり、此の際は近海に一時漁事振はざるを普通とす。然れ共之とて年に依り一樣ならず。七年度の如き十月中近海に相當漁斷へず、色丹島方面に漁獲なかりき。要するに本海區に出漁する場合は八月中旬より着業し、十一月に入り漁況の如何に依り同月上旬又は中旬頃切揚ぐる豫定を以て出漁するを最も經濟上有利とす。

(ロ) 漁具及漁法

本場使用の延繩一鉢分の構造方の如し。

- 幹 繩、綿糸二十番手三〇六本子三子撚 長一六〇尋
- 枝 繩、右 同 長 二〇尋二本
- 浮 繩、右 同 古物長一〇尋四本
- 浮 子、桐三寸徑長三尺五寸之に二間竹の旗を附す二個
- セキヤマ、二九番鋼線三四子撚紺綿糸三號せり長五尋六本
- 釣 鉤、二七番鋼線三四子撚長三尋、四寸釣鉤付六本
- 繩 籠、竹龜甲目編一尺八寸徑深八寸一個

右の内枝繩は揚繩の際取外し、投繩の節取付くるものとす。之を圖示すれば左の如し。



白山丸に於ては以上のもの五十鉢内外を使用し、尙此外に附屬具として夜間の標識として、ダルマ燈又は惠比壽燈一個宛を繩の兩端に附せり。

本漁場に出漁する漁船は九州以北太平洋岸各縣及秋田、山形、新潟等の日本海面諸縣に涉り其漁具構造は一樣ならずも、皆大同小異にして幹繩、枝繩等の太さは畧同様に概ねかつち染こし、枝繩の長さには於て五尋乃至二十尋、浮繩の長さ五尋乃至十尋、せきやまの長さ三尋乃至七尋、ワイヤーの長さ二尋乃至五尋の間にあり。枝繩は揚繩の際取外すもの普通なれ共縛れを生ぜざる限り結着の儘になすものあり、各得失を決し難きも漁具材料は總て細小にして強力なるを可し、浮標繩及枝系の長さは漁期の前半に長くし後半に短くするを可し、夜繩に於ても短きを可しする如し。

尙副漁具として「モーターラインホーラー」は波浪甲板に曝露するを以て密閉式なるに係はらず、濕氣のため故障を生し易く一般には寧ろ傳導「ラインホーラー」を適當と認めらる。

(ハ) 漁場及海況

漁場は別紙漁場圖に示すが如く、年に依り一樣ならずも雖も大体に於て八月青森縣鮫角東方百哩乃至百五十哩附近、又は鮫角、尻矢岬間沖合三四十哩附近より始り、九月に入りては漸次北方に移動し、北海道襟裳岬より南南西乃至西南西の方位に於て同岬より二十哩乃至四十哩附近に暫く滞留するを普通とす。十月下旬より十一月に入りては益々北方に移動し、北海道恵山岬より襟裳岬に至る線を軸心とし、之が南側又は北側に出沒するも十一月に入りてよりは、漁場區域狭く魚群は集結して移動し稀に大漁に遭遇することあるも、豫め漁場位置を推定すること難し。

年により十月上旬一時此方面に漁獲減じ、擇捉島、單冠灣沖合又は色丹島附近に大漁あることあり、七年度の如きは、漁場尻矢岬寄り即ち西方に移動し、十月中引續き相當の漁獲あり、反て擇捉島方面には殆んど漁獲を見ざりき、次に前記鮪漁場の移動と海況の變化とを對照するに、其間甚密接なる關係あるもの如し。即ち海流圖に示すが如く日本海に入れる黒潮支流の尖端、即ち津輕海峽を通過せる暖流は暫く東流し、襟裳岬東方を南下する寒冷なる水と衝突し、南又は南東の方向を採る。然るに此の附近は寒水帶の外側に沿ひて黒潮本流東北方に流るゝを以て、前記の海峽通過は抵抗少き此の暖水帶と寒水帶との境界線附近を流るゝものと見るべく、此部位即ち寒暖兩水の稍混ぜんとする附近に好漁場を發見するを普通とす、寒

暖兩流の消長により此境界線は移動するを以て漁場も自ら移動あり。例へば昭和三年度の如く津輕海峡を通過する暖流の勢力強く、寒流を壓せる場合は漁場は大底東方に偏し、又七年度の如く右に反する場合は西方尻矢岬寄りに好漁を見るが如し。尙黒潮本流の勢力の強弱に因りても同一の結果を豫想せらる。而して此の寒暖兩流の境界は數哩にして水温二、三度の差を見ることあり。或は一哩を隔て五度下ることもあるも、概して表面水温を測ることに依り明瞭に發見し得らる。

又漁期間の一般水温狀況を見るに、九月中旬迄は表面に於て十九度乃至二十一度、二十尋に於て十八、九度前後を示し、以後九月末迄は表面十九度前後、二十尋十七度前後、十月表面十九度乃至十七度にして、漸次寒冷に向ひ月末より十一月に掛けては表面十七度以下に下るを普通とす。

水温と漁況との關係は襟裳岬以西の漁場に於ては余り寒冷なる所は好しからず。漁期の初頭と終末に依り差あるも十七度以下に降れば、漁獲著減するを普通とす。之に反し同岬以東、色丹島に至る海區に於ては八、九度に下るも漁獲あり。重要な研究事項なるも未だ理由を明にせざるを遺憾とす。

(二) 漁船及乗組員

本場試験船白山丸は八十九噸余「ディーゼル」二百馬力、從漁人員船長以下十八名にして、本漁業を經營するには稍大に過ぐ、實地從漁せる他縣漁船は十七、八噸乃至二十五、六噸にして、最も適當せるは二十噸乃至三十噸級にして、機關は四、五十馬力無水重油發動機を可とす。乗組人員は船長以下十名乃至十一名にして、本縣現在の手繰網漁船を使用するに於ては之等乗組員の船内住居設備をなし、船尾に小檣を建て、帆を張り得る様改装し「ラインホーラー」一台を取付くるのみにして、其儘出漁し得らるゝものなり。縣下當業者は一般に此の方面に出漁するには特に大型の漁船ならざれば不適當なる如く誤解せる如きも、現在の底曳網漁船にして二十噸級、四、五十馬力を有するものなれば充分に出漁の可能性あり。漁場も漁場圖に示すが如く比較的近海につき荒天の場合は容易に最寄の港灣へ避難し得らる。

(ホ) 漁法其他

前記漁船にて一鉢の長さ百六十尋の繩五、六十鉢を使用するものとして、揚繩には手捲又は動力川「ラインホーラー」を用ひ、普通一航海は五日前後にして操業回数五回乃至七回、之に對する餌料準備生柔魚一千五百尾乃至二千尾とし、他に餌料

及漁獲物保藏用として一航海碎氷一噸半位を準備す。根據地に於て右諸準備を整へ豫定漁場に未明又は日没前到着する様に
出帆し、途中表面水温を測りつゝ航行す。(普通水温の測定を行ふもの少し)漁場に到着すれば、朝「マヅメ」又は夕「マヅ
メ」(漁獲は朝繩ミ夕繩ミ良否日により一様ならざるも、延繩には朝繩を主とする方安全なり)を見計ひ船尾より投繩ボンデ
ン(浮子)一本置に旗を附し、旗は紅白交互の順位ミす。(之は繩廻り中鮎の羅りたるを發見し易き爲め)投繩終れば、朝繩
なれば繩廻りをなし漁獲物あれば之を外して船内に取り入る。晚繩なれば繩に浮標燈を附し、之を守り午後十時頃揚繩す。
朝繩にて弗々漁獲あれば夕方迄置き、漁獲なき時は午前中に揚げ、他に適當漁場を探し晚繩を入れ又は翌朝迄漂流するもの
ミす。斯くて餌料のある限り操業し、四、五日にして根據地に歸り漁獲物を陸揚げす。餌料柔魚の良否は漁獲に影響するを
以て丁寧に取り扱ひ、薄箱に並べ「バラフヒン」紙を載せ其上に充分碎氷を置き、氷藏し置くを良しミす。又漁獲物は船内に
取入後成る可く速に内臓及鰓を取除き腹中に氷を詰め魚船に移動せざる様氷藏す。

(~) 累年試験成績

試験開始より本年度迄の出漁經過及漁獲状況を表記すれば左の如し。

累年試験成績表

年次	出漁月日	終漁月日	從漁期間	出漁日數	投繩回數	漁獲	
						種類	數量
昭和三年度	10・1	11・30	六日	六日	三回	マグロ キンダイ メカヂキ	一、九三六・〇〇 六尾 一〇尾 八尾
同四年度	九・三	11・30	八日	八日	四三回	マグロ メカヂキ	三、一六三・〇〇 三尾 一八尾
同五年度	九・七	11・16	七日	八日	二六回	マグロ メカヂキ	二、一七九・〇〇 五尾 一八尾

金額

三、七六五・六二

四、〇三三・九三

三、一七五・八〇

同六年度	同	二・一七	三日	翌日	三回	マカチキ メカチキ	二、六七圓九〇 七尾	二、三三・三〇
同七年度	八二元	二・一七	六日	翌日	四回	マカチキ メカチキ サメ キンダイ	六、五〇圓五〇〇 二〇尾 二七尾 七尾	四、三三・五九

(ト) 收支經濟

本試験に於ける白山丸自らの收支經濟を記せば、前記の如く船体機關共過大なるを以て實際に即せざる嫌あり。依て既往五ヶ年間の實狀調査の結果に基き、適種漁船の設備費併に收支經濟を左に掲ぐ。

一、設備費（昭和七年十月現在に於ける二十噸級五十馬力程度の漁船に付きての調査なり。以下同じ）
 一金八百九拾七圓也

内 譯	延繩五〇鉢（撥備ワイヤ共）	六五〇、〇〇
	繩 籠 五〇個	一〇、〇〇
	『ラインホーラー』（取付費共）	一一〇、〇〇
	浮標 燈 二個	三〇、〇〇
	魚揚用「テリック」一本	三〇、〇〇
	長柄 鈎 三本	三、〇〇
	庖 丁 三本	二、〇〇
	作業 燈 三個	一〇、〇〇
	モ リ 二本	二、〇〇
	其他雜器具代	三〇、〇〇

二、收支計算

(收入)

一金參千八百九拾九圓也 總收入手取金

內 譯 鮪 五千四百貫 單價 七文半

小 鮪 十尾 單價 五文

女 梶 木 二十尾 單價 五文

其 他 參拾圓 單價 五文

餌 柔 魚 殘 賣 却 代 四拾圓

(支出)

一金參千參百參圓拾錢也 總支出額

內 譯 綿糸ロープ 二、四〇〇尋 七六、八〇

セキヤマ 五〇本 一〇、〇〇

釣 鈎 二〇〇本 三〇、〇〇

鮪 繩 籠 補給五個 二、〇〇

雜 器 具 補給 一〇、〇〇

『カーバイト』 一五罐 四五、〇〇

蠟 燭 二袋 八〇

淡 水 六噸 三、六〇

碎 氷 二〇噸 一四〇、〇〇

餌 柔 魚 二一、〇〇〇尾 五二五、〇〇

重 油 七五〇斗 五二五、〇〇

『マシン』油 一四〇斗 二八〇、〇〇

最初の年度は不要なるも年度割として差加ふ。
 最初の年は殆んど不要。
 初年度は半數にて足る。

燈油	一五斗	三〇、〇〇	
『ボンデン』竹	二〇本	二、〇〇	補充用
桐浮子	二〇本	四、〇〇	補充用
『ウエス』	二〇貫	九、〇〇	
木炭	五俵	一五、〇〇	
食器	補給	一、〇〇	
通信費	三ヶ月	六、〇〇	
食費	十人三ヶ月	二四〇、〇〇	一人一ヶ月七圓
給料	十人三ヶ月	九一、〇〇	船長機關長各月四拾圓、其他七名平均貳拾八圓
雜費		三〇、〇〇	
漁獲歩合金	(一割)	三八五、九〇	漁獲手取金の一割

(差引)

- 一金參千八百九拾九圓也 總收入高
- 一金參千參百參圓拾錢也 總支出高
- 一金五百九拾五圓九拾錢也 差引利益金

但し設備費を借入金に依る場合は金利及償却金として貳百貳拾圓(五ヶ年償却)を見る必要あり。

以上に見る如く本試験區域は漁場比較的陸岸に近く房總方面の如く遠く數百裡外に航走するの危険を冒す要なく、從て漁船の安全に經費の嵩まらざるは鮪漁場として最も有利なる所にして且つ漁場は概ね限定せられ漁場探索の爲め勞を費すこと少く漁獲の豐凶は比較的少く一獲數千金の大漁は稀なるも一船九、十兩月にて貳千圓乃至五千圓を漁獲し上位は七、八千圓を漁獲せり、六年の如き十月上旬色丹島方面に出漁せるものは一航海貳、參千圓を水揚げせしものありしも、之等は異數にして敢て此處に此方面の出漁を勸奨せざれば共漁況の如何に依りては出漁を躊躇すべきにあらず。九、十月を中心に前後約三ヶ月函館を根據とし稜

裳岬以西に出漁するとして二十噸級四十馬力乃至五十馬力漁船の經費は前記の如く充分の余裕を見て漁獲歩合を除き一漁期間貳千八百余圓にて足り、漁獲高參千五百圓にて收支償ひ中位以上の漁獲をなすに於ては利益を見ること容易なり、前記の例は給料歩合併用制となせるも全々歩合に依る場合は漁獲高より漁業用諸消耗品費を引去り殘額を船主十五人前、乗組員各一人前に分配するを實驗上適當とすべし、魚價最も低下せる（初年度の約三分の一）七年度に於て三、四千圓の漁獲を擧げ得るより見て其經營は割合に安全性あり、且つ漁場の近距離なる点より見て本縣現今の底曳網漁船の漁業轉換先として最も適當なるもの一つと認むるを以て敢て此處に此の方面への出漁を希望するものなり。

四、深海漁場調査

(一) 趣 旨

本事業は前年度よりの繼續事業にして本縣沖合水深二百米以上の深海漁場を調査し水深底質及魚族の棲息移動の状態を明かにし以て一般漁船操業上の便宜を計るに共に新規漁場を發見せむに在り。

(二) 期 間

十二月六日より二月六日に至る二ヶ月間。

(三) 方 法

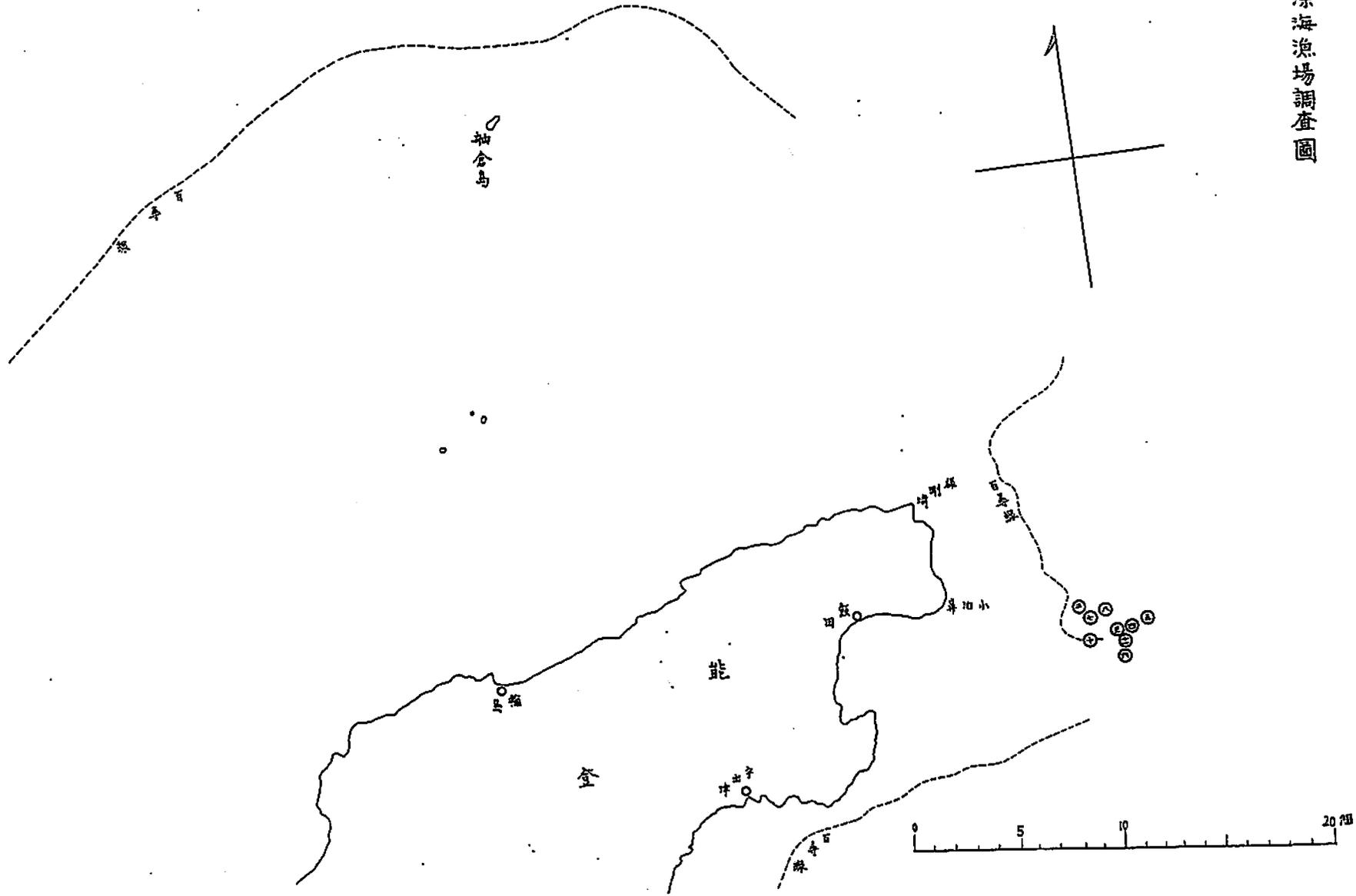
前年同様試験船白山丸にて一艘曳手繰網を使用す。

(四) 經過及結果

宇出津を根據とし舢倉島沖にて數日操業せる外主に能登小泊沖合に於ける調査に従事したり。此間荒天其他の爲の出漁意の如くならず。従業日數十二日にして鰯、蟹其他の漁獲金額四百五十七圓一錢なりき、調査の位置並に魚種水深等詳細は別項操業日誌記載の如し。

(五) 操業日誌

深海漁場調查圖



月日	漁場 符號	漁場位置	天候	風向風力	水深底質	漁獲物	摘要
十二月六日	一	小泊鼻北十二湮	曇天	北東三	百六十尋 Sm	たら 二六〇	
同月八日	二	小泊鼻磁針方位 東南東七湮	曇天	北々西六	百四十尋 Sm	たら大小混合約二〇〇 かに大小混合二〇〇	
同月十日	三	小泊鼻同 東南南八湮	曇天	西四	百四十五尋 Sm	はちめ 二〇〇	外にかじか、かに若干有
同月十五日	四	小泊鼻同 東南南九湮	曇天	北西四	百六十尋 Sm	はちめに 二〇〇	外にはちめかれたら若干有
同月十八日	五	小泊鼻同 東南南九湮	曇天	南西二	百六十尋 Sm	たら大 二〇〇	外にかに小たら及はちめ若干有
同月十九日	六	小泊鼻同 東南東八湮半	半晴天	西二	百六十五尋 Sm	はちめに 二〇〇	外にかれ、かに若干有
同月二十五日	七	小泊鼻同 東南南六湮半	曇天	北西三	百二十尋 Sm	大たら 二〇〇	外にかに若干有
同月二十八日	八	小泊鼻同 東南南七湮	曇天	北東三	百二十二尋 Sm	中たら 二〇〇	外にかに若干有
一月六日	九	同	曇天	北東三	同	たら大 二〇〇	
同月十日	十	小泊鼻同 東南南六湮半	半晴天	東三	百十尋 Sm	さら大 二〇〇	外にかに若干有
同月二十三日	十一	小泊鼻同 東南南七湮	降雪	北東五	百十五尋 Sm	たら 二〇〇	外に岐二尾かに若干有
二月六日	十二	小泊鼻北 西十湮	曇天	東二	百五十尋 Sm	たら 二〇〇	外にかれ四〇有

備考

(イ)(ロ) 水深を示す等は六尺とす
漁獲物は尾數を示す

五、定置漁具改良試験

(一) 試験の趣旨

本事業は昨年度よりの繼續事業にして本縣重要漁業たる定置漁業の改善發達を期する目的を以て定置漁具を敷設し漁具材料の適否、漁網染料の效果比較調査等を施行し漁業經營費の節減を計り、一面海況と漁況との關係を研究し漁獲の豊凶を豫知し本漁業の堅實性を一層大ならしめんとするに在り。

(二) 試験の方法

前年度に引續き鰻角網(瓢網)一統を敷設し之に依り各種試験研究を行ふ事とせらるも經費の關係上、本年度に於ては左記囑託條件にて宇出津町府波吉治氏に之が實施を囑託し、本場は専ら研究調査に當る事とせり。

記

囑託條件

石川縣水産試験場を甲と稱す。

被囑託者を乙と稱す。

一、甲は乙に囑託し鰻角網漁業一統を經營し、各種試験調査を施行するものとす。

二、右鰻角網漁業を經營するに當り、甲乙各經費の分擔を左の通りとす。

甲負擔のもの

(一) 糸網一統半(昭和六年度使用のもの)

(二) 糸網修繕費百貳拾圓以内

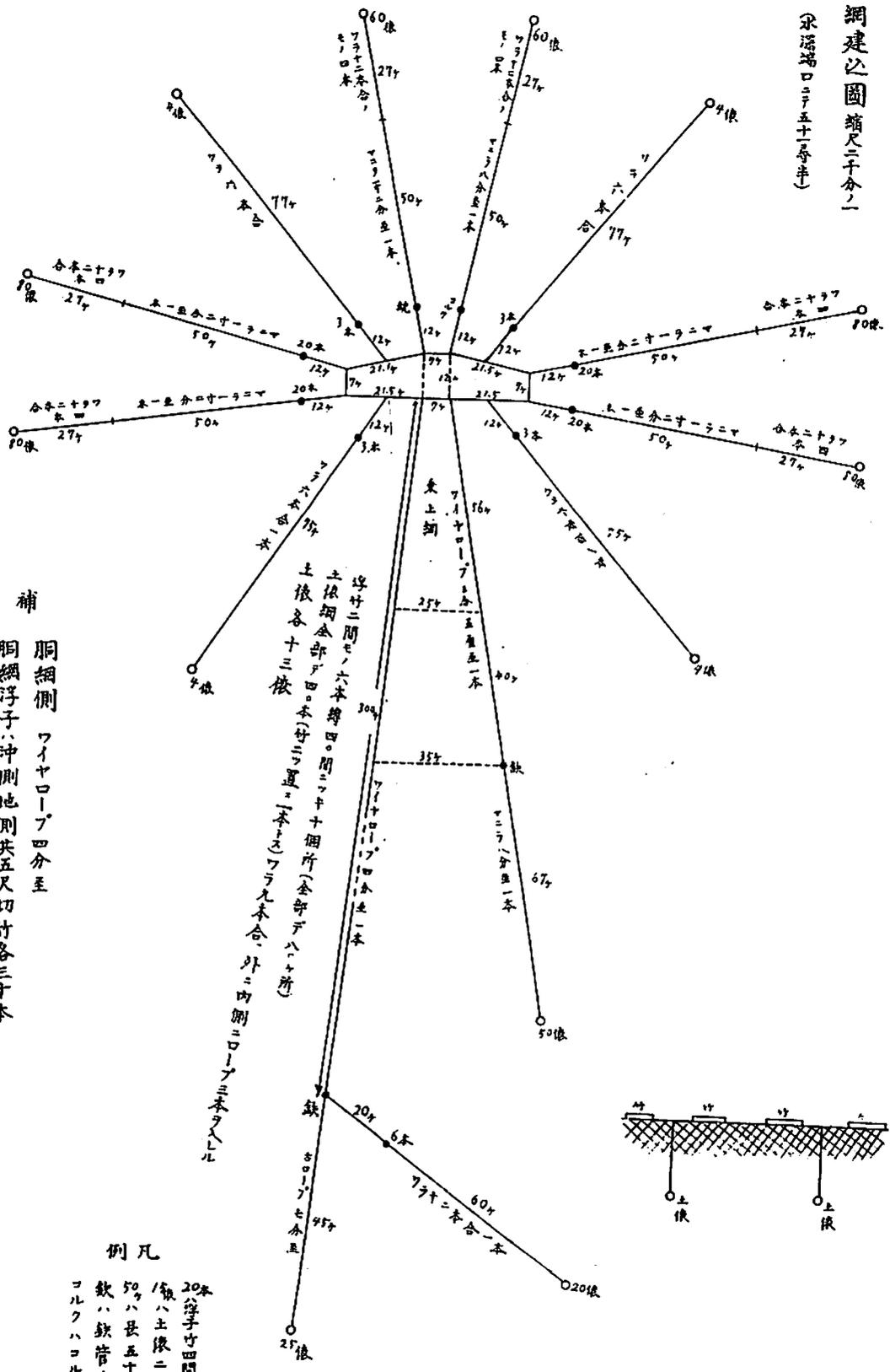
(三) 薬打網、染料、薬繩、薬網代として金六百八拾圓以内

(四) ロープ類にして前年使用のもの、現品若干

(五) 昭和八年三月一日より同年同月三十一日の期間に於て、漁獲物を漁場より宇出津港岸壁に運搬するに要する運賃として金百五拾圓以内

乙負擔のもの

網建込圖縮尺二千分一
 永福端口ニテ五十尋半



補記

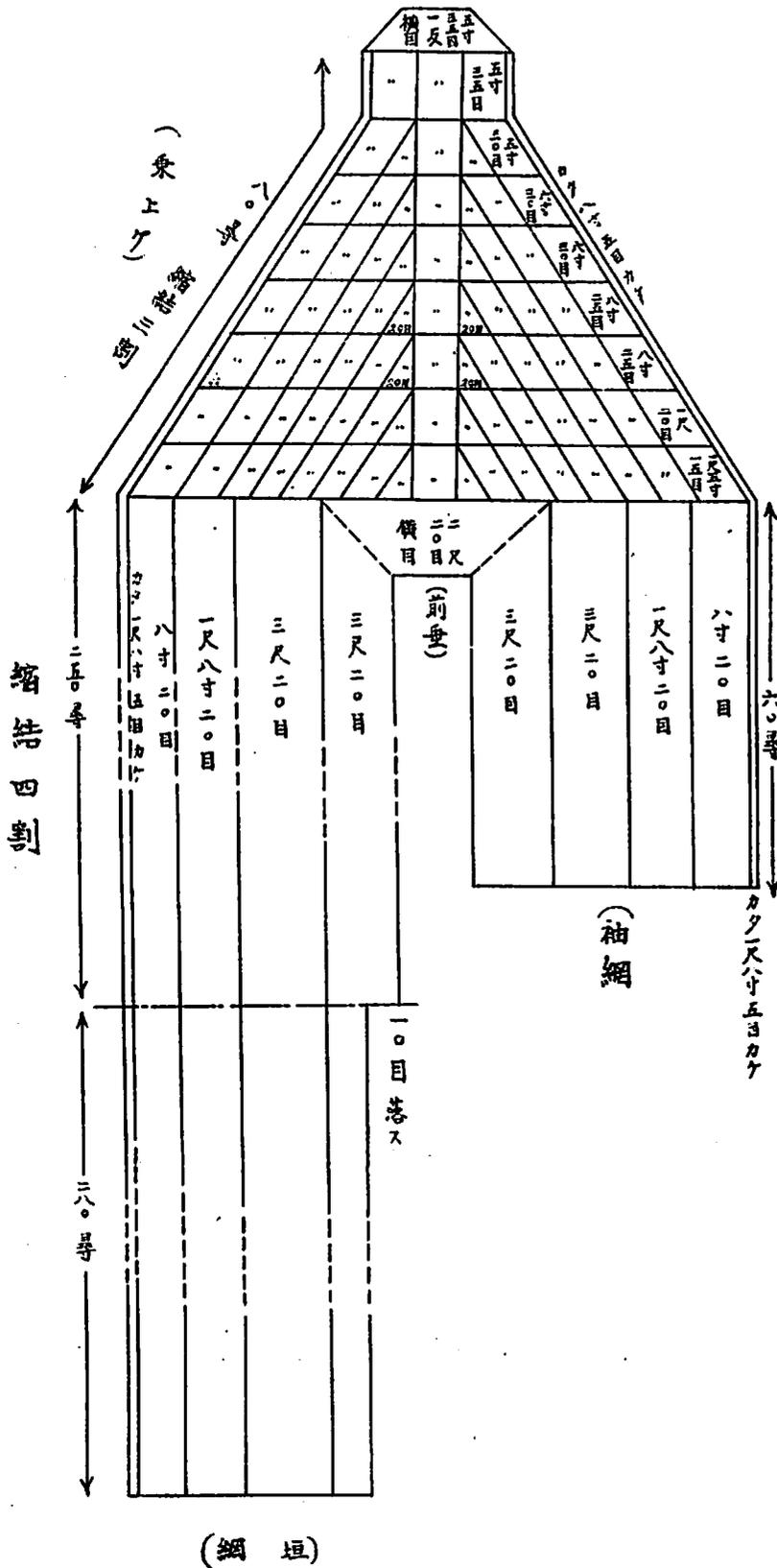
胴網側 ワイヤロープ四分至
 胴網浮子ハ沖側地側共五尺切竹各三十本
 魚捕側コルク浮子三〇個
 乗上ノ上側及袖ノ土俵網竹ノ配置手網ニ合ジ

例凡

20本 浮子竹四間モノ本数ニ十本ノ意
 俵ハ土俵二十俵ノ意
 50 俵ハ長五十尋ノ意
 数ハ鉄管浮子ヲ示ス
 コルクハコルク浮子ヲ示ス

葦網配置圖

縮尺二千分の一



縮結三割三分

(例 凡)

- イ 海深八端ロニテ五十二尋半
- ロ 網地、長サ八十尋切トス
- ハ 目ノ大サ八目足ノ長サトス

(一) 鰯角網敷設並に經營に要する諸經費中、甲負擔金額を超過する一切の經費、但し右經費中には漁場借上料、借船料、漁夫歩合金、網下し、其他の臨時傭人料、借船修繕代、漁夫飲食代、鰯運搬料等一切を含むものとす。

(二) 試験期間中漁具破損せる場合、之が修繕費。

三、乙の收得額が乙の負擔額に満たざる場合、甲は之が補償の責に任せず。

四、漁獲金額(但し魚市場手数料を控除せるもの)を甲乙各左の割合に依り分配收得するものとす。

甲收得額 漁獲金額の百分の二十二

乙收得額 漁獲金額の百分の七十八

五、前項の甲乙各收得額は試験期間中、毎月五日迄に其前月中の漁獲金額につき、計算收納するものとす。

六、試験期間は二月初より四月末迄三ヶ月間とす、但し事情に依り甲乙協議の上變更するこゝを得。

七、漁具設置の方法、使用材料等につきては試験の爲め甲の指揮に従ふ事。

八、漁具材料購入に當りては甲乙協議の上之を行ふ。

九、乙は昭和八年三月中に於て漁獲物運搬用の枠網一統、及び之に伴ふ必要なる設備を新調し之が適否を試験すべし。

(三) 漁夫其他従業員
従業総人員十三名、内網漁夫十一名(網舟七名、口舟二名、台舟二名)曳船用發動機船機關士一名、同舵取一名とす、之が雇

傭條件歩合率は前年通りにつき省畧す。

但し本年度は前年支給せる一ヶ月六圓の食費手當を廢止せり。

(四) 漁 船

常時四隻を使用せり、内二隻は長三十尺の和船にて口舟及台舟と各二人乗り、一隻は長三十六尺の和船にて網起舟に充て七人乗りとす、他に網舟漁場往復時及漁獲物積取船の曳舟用として八馬力發動機船一隻を置く、尙ほ網卸しの際は臨時胴舟二隻を雇用せり。

(五) 漁獲物の運搬

漁獲物は殆んぎ中羽鱈のみにして總て宇出津市場に於て生賣りせり、之が運搬法並に積取料等前年の通りなるも特に本年度に於ては積取料の節減を計る目的にて、漁獲物運搬用杵網を新調したるも右製作後、大量漁獲なかりし爲め實地使用するの機会を得ざりき。

(六) 漁場

漁場は鳳至郡三波村字藤波地先約一千七百五十間、水深五十一尋半(はぐち)底質砂泥にして其位置並に附近鰹角網敷設狀況等は前年度報告書の漁場圖を参照せられ度、本年度は圖中右より四列目、沖より二番目の位置に変更せり。

(七) 漁具

漁具は鰹角網(瓢網)にして其構成は袋部(系網)乗上り部(葉網)手網袖網部(葉網)より成るも袋部構造は前年通りにして、乗上り部袖網手網部構造は別圖の如く深さの増大に伴ひ改造せり。

尙ほ「コルク」製大浮子及鐵浮子は前年使用のものを繼續使用し、其結付個所は別圖網建込圖記載の通りとす。

(八) 經過(操業日誌参照)

十二月十日網仕立其他の準備を開始し、一月二十八日之を終り翌二十九日網卸しに着手、二月二日網卸し全部を終了せり、二月三日より出漁を開始し四月末迄操業、五月一日より網揚げに移り同月三日終了、本試験を切揚げたり。此間準備日數五十日網卸し、網揚げ八日、操業日數八十七日間なり、操業期間中は荒天急潮等の爲め出漁不可能なる日殆んぎなく、僅に荒天休漁三日に過ぎず、近年稀なる出漁率を示せり。

操業日誌

月	日	風		水		比		潮		水色		漁獲物			備考	
		風向	風力	表面	四〇米	表面	四〇米	潮向	潮速	透明度	種	類	數量	金額		
二月	三日	前														初出漁セルモ時化ノ爲メ中止
同	後	曇	北	東	二	一〇・三	一〇・四	一〇・六	二四九	二五八	二五八	二五八	二五米			

同	四日後同	西	二	10.0	10.0	10.0	10.0	二五二	二五二	二五二	10米	イワシ	二舟	二五〇	
同	五日前同	東北東	二	10.0	10.0	10.0	10.0	二五八	二五八	一五五	一三米	同	一舟	二六〇	
同	六日後晴	北	二	10.0	10.0	10.0	10.0	二五九	二五九	二五九	同	同	三舟	二九〇	
同	七日前曇	西南西	三	10.0	10.0	10.0	10.0	二六〇	二六〇	二六〇	一四米	同	二五舟	一九七〇	午後時化
同	八日後雨	北東	四	10.0	10.0	10.0	10.0	二六一	二六一	二六一	一〇米	同	四舟	九三〇	
同	九日同曇	西北西	三	10.0	10.0	10.0	10.0	二六二	二六二	二六二	一〇米	同	三舟	二四一〇	
同	十日同	東南東	一	10.0	10.0	10.0	10.0	二六三	二六三	二六三	一〇米	同	一八舟	一五四〇	
同	十一日前同	北	二	10.0	10.0	10.0	10.0	二六四	二六四	二六四	一七米	同	八舟	九〇〇	午後時化
同	十二日同	南々東	三	10.0	10.0	10.0	10.0	二六五	二六五	二六五	一七米	同	三舟	五〇〇	午後時化
同	十三日後曇	南々東	一	10.0	10.0	10.0	10.0	二六六	二六六	二六六	一八米	同	九舟	一三〇	
同	十四日同	南	三	10.0	10.0	10.0	10.0	二六七	二六七	二六七	一七米	同	一舟	一一〇	
同	十五日同	西南西	二	10.0	10.0	10.0	10.0	二六八	二六八	二六八	二米	同	三舟	四八〇	
同	十六日同	北々東	三	10.0	10.0	10.0	10.0	二六九	二六九	二六九	一七米	同	七舟	一〇八〇	
同	十七日同										同	同	六舟	七六〇	欠測
同	十八日前曇	北	三	九.七	九.六	九.八	二四八	二五三	二五三	二五三	一四米	同	二舟	二六〇	午後時化
同	十九日後同	北北西	二	10.0	九.八	10.1	二五五	二五五	二五五	二五五	二五米	同	九舟	九二〇	
同	二十日同	南西	三	九.三	九.五	九.六	二五三	二五三	二五三	二五九	一七米	同	六舟	七六〇	

同	九日同	晴	北東一	八・九	九・一	九・三	二五二五	二五二五	二五〇五	西南西	塩渚	一〇米	同	二六舟	一九・三〇	
同	八日同	同	西二	九・三	九・三	九・〇	二五〇六	二五〇六	二五〇六	東	塩渚	一七米	同	一六舟	一九・三〇	
同	七日同	同	北一	九・〇	九・三	九・二	二五〇四	二五〇三	二五〇三	北東	塩渚	一七米	同	一五舟	二二・六〇	
同	六日同	同	北東三	九・〇	九・〇	九・〇	二五〇〇	二五〇〇	二五〇九			一三米	同	一四舟	二四・六〇	
同	五日同	同	北一	九・一	九・三	九・三	二五二九	二五二九	二五二九	北東	塩渚	一七米	同	ナシ		
同	四日同	同	南々東二	九・〇	九・〇	九・〇	二五四〇	二五四〇	二五四〇	東	塩渚	一五米	同	一山	三・三〇	
同	三日後	同	北東二	九・〇	九・三	九・三	二五二九	二五二九	二五〇九	南西	塩渚	一七米	同	二舟	二八・〇〇	
同	二日同	同	南二	九・二	九・三	九・三	二五二八	二五二七	二五二六			一五米	同	二舟	三〇・〇〇	
三月	一日同	同	北二	九・八	八・九	九・〇	二五四九	二五四三	二五四三	南西	塩渚	二〇米	イワシ	七舟	一〇七・六〇	
同	二十八日同	同	南東二	九・三	九・三	九・三	二五三四	二五三四	二五三〇	東	塩渚	一五米	小サバ スルメイカ	一山	五・四〇	
同	二十七日同	同	同二	九・三	九・三	九・四	二四九〇	二四九五	二五〇三	東北東	塩渚	一五米	イワシ	二舟	二〇・八〇	
同	二十六日前	同	北三	九・三	九・四	九・五	二五三四	二五三四	二五三四	東	塩渚	一五米		ナシ		午後急瀬ノ爲 メ起サズ
同	二十五日前	曇	南々西二	九・三	九・五	九・六	二五五六	二五二七	二五二八	東南東	塩渚	一四米	同	一舟	一八・八〇	
同	二十四日同	雨	北西一	九・三	九・四	九・五	二五三〇	二五三〇	二五三〇			一七米	同	一六舟	一七・六〇	
同	二十三日同	曇	南西一	九・六	九・六	九・六	二五三〇	二五二九	二五二〇	北々東	塩渚	一五米	同	二舟	二二・六〇	
同	二十二日後	晴	西北西二	九・六	九・七	九・七	二五四六	二五四六	二五五二	南東	塩渚	一五米	同	五舟	六三・四〇	
同	二十一日前	同	同四	九・四	九・六	九・七	二五四一	二五四一	二五四二	同	塩渚	一三米	同	三舟	二〇・八〇	午後時化

同	二十日	同	雨	北東	三	八・九	九・一	九・三	二五二五	二五二五	同	塩湮	一四米	同	一八舟	九二・〇〇	
同	十一日	同	晴	南々東	二	九・二	九・〇	九・一	二五二六	二五八四	東	塩湮	一五米	同	一舟	一六・八〇	
同	十二日	同	曇	北西	三	八・八	八・九	九・〇	二五〇三	二五二二	南々西	塩湮	二米	同	六舟	七四・〇〇	
同	十三日	同	晴	北	一	九・〇	九・一	九・二	二五〇三	二五二二			二米	同	四舟	五八・〇〇	
同	十四日	同	曇	西	二	九・〇	九・一	九・二	二四九八	二五〇八	東	塩湮	一五米	同	五舟	五九・六〇	
同	十五日	同	同	東	一	八・九	九・〇	九・〇	二五五七	二五五七			一九米	同	八舟	一〇八・〇	
同	十六日	同	雨	北東	一	八・九	九・〇	九・〇	二五二二	二五二二			二〇米	同	六舟	七六・〇〇	
同	十七日	同	曇	同	一	八・八	八・九	九・〇	二五〇三	二四八六	南	塩湮	一五米	同	二舟	二六・〇〇	
同	十八日	同	雨	北々西	二	八・八	九・〇	九・〇	二五〇八	二五〇三	東	塩湮	二〇米	同	五舟	七〇・四〇	
同	十九日	同	曇	東南東	三	九・〇	八・九	九・〇	二五〇九	二五〇九	西北西	塩湮	一四米	同	一四舟	二三四・八〇	
同	二十日	同	同	東	一	九・〇	八・九	九・〇	二五三六	二五三六	北	塩湮	一五米		ナシ		
同	二十一日	同	同	西	三	八・九	九・〇	九・〇	二五四六	二五四二			二五米		三舟	二八・四〇	
同	二十二日	前	曇	北西	三	八・九	九・〇	九・一	二四二六	二四二六	東北東	塩湮	二五米		ナシ		
同	二十三日	後	同	北	一	八・九	九・〇	九・〇	二五五二	二四九二			二米		一山	・九三	
同	二十四日	同	同			九・〇	八・九	九・〇	二五五四	二五四四			一四米		一舟	二二〇・〇	
同	二十五日	同	同	東	一	八・九	八・九	九・〇	二五〇七	二五〇七	東北東	塩湮	一五米		ナシ		
同	二十六日										北々東	急			ナシ		

時化ノ爲メ休
漁

同	二十七日後	南北西三	八九	八九	九〇	二四三	二四三	二四三	東南東	五米	イワシ	一舟	二・六〇	漁時化ノ爲メ休
同	二十八日													
同	二十九日後	南一	八七	九〇	九〇	二四八	二四八	二五〇	南東	四米		ナシ		
同	三十日同	東三	八九	九〇	九〇	二五七	二五七	二五七		四米		ナシ		
同	三十一日同	北二	八九	九〇	九〇	二五〇	二五〇	二五七	南東	七米		ナシ		
四月	一日同	北東二	八九	九〇	九〇	二五九	二五〇	二五〇		五米	イワシ	一山	四・〇〇	
同	二日同	南西四	八九	九〇	九〇	二五〇	二五〇	二五六	東南東	五米	同	一舟	三・八〇	
同	三日同	東二	九・九	九・五	九・四	二五三	二五三	二五三	南西	五米	スルメイカ	一山	二・〇〇	漁時化ノ爲メ休
同	四日同													
同	五日同	東一	一〇・〇	九・八	九・五	二四六	二四八	二四八	南西	四米	スルメイカ	一山	二・三	
同	六日同	東南東五	一〇・〇	九・八	九・五	二四九	二四八	二五二	同	二米	同	一山	二・〇〇	
同	七日同	同三	一〇・四	九・五	九・四	二四二	二四四	二四六	東	一〇米		ナシ		
同	八日後	南西一	一〇・四	九・四	九・四	二五二	二五二	二五二	東北東	五米		ナシ		
同	九日前	同三	一〇・〇	九・八	九・八	二四八	二四八	二四八		五米		ナシ		
同	十日後	東二	一〇・〇	九・八	九・八	二四九	二四九	二四九	東南東	五米	イワシ	一山	二・〇〇	
同	十一日同	南々西二	九・八	九・六	八・九	二四六	二四六	二四五	東北東	二米		ナシ		
同	十二日同	北東二	一〇・〇	九・八	九・八	二四七	二四七	二四七		四米		ナシ		

同 三十日 同 換	18.11	11.6	10.0	12.2	12.9	12.2	15米	ナシ	網揚作業ヲナ ス
五月一日									垣網浮標取除 キ
同 二日									
同 三日									網揚終了

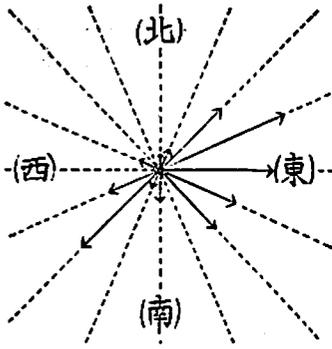
(十) 結果

(1) 漁獲状況

本年度網敷設の漁場は柔魚、其他の雑魚殆んぎなく鰻漁のみにして、本年鰻は別項一般漁況の項に記載の通り魚群の來游早く本試験網敷設當時、既に盛期に入り初出漁より相當の漁獲あり二、三月中繼續せるも、四月に入りては殆んぎ見るべき漁獲なく之を月別に記すれば二月一九五舟、三月一四六舟、四月三舟余にて合計三四四舟余なり、外に柔魚若干にして漁獲數量に於ては前年度の六倍余に當るも魚價安く、金額に於て三倍余の四、五〇三圓八四錢に過ぎざりき。

(ロ) 海況氣象及漁況との關係

潮流。潮流は前年同様大体に偏東流なるも南西流稍多かりしは前年と異なる所なり。即ち潮流觀測日數五十三日につきて各流向別日數を見るに東北東最も多く十一日、次で東九日、南西七日、北東、東南東、各六日、西南西三日、南二日、其他北々東、北、西北西、南々西、各一日の割合となり、日數比により圖示するに上圖の如し、流速は前年に比し概して緩にして普通八分の一漣時より二分の一漣時にして四分の三漣時に達したる日二、三日に過ぎず、且つ急潮の爲め網起し不可能なる等の事殆んぎなかりき、鰻漁獲との關係を見るに流向と漁獲の多寡との間に顯著なる關係なきも、漁獲日の殆んぎは偏東流にして操網し得る範圍内に於ては漁獲高は潮流の強弱に影響なきこと前年と同様なりき。



水温、比重。水温、比重は表面、四〇米、八〇米の三ヶ層に於て観測せるが、本年は水温の下降早く二月初め既に十度五、六分前後に下り、前年に比し二度余り低く従つて鱧の來游も約一ヶ月早く、二月初旬既に盛漁期に入れり。其後引續き十度より九度前後の水温を持続し、漁獲も引續き活況を呈せしが、漁期末水温上昇も前年に比し稍早く四月下旬には表面十一度乃至十四度余を示すに至れり。従つて漁獲も四月初より斷續的となり振はず、本試験網にては殆んど漁獲なかりき、比重に於ては漁期中時期の推移に伴ふ一般的變化なく日々異り、大体二四、八〇前後より二五、五〇前後にして二四、八〇より二五、三〇迄を最多とし、漁獲との間に顯著なる關係を見ざるも大体に二五〇〇——二五、二〇の中等比重を最適當とするが如し。透明度。前年度の調査に於て透明度は鱧の來游に最も、關係深く、初期透明度大なる中は未だ鱧の來游なく透明度減するに及び漁期に入れるを認めたるが、本年度は二月初め網卸し當時より既に前年の盛漁期中の透明度を示し、期間中時期に依る變化を見ざりしも大凡そ十七米より十米にして十四、五米最も多く、平均十三米六米なり前年の平均に比し約五米少し、鱧の豊凶と透明度との關係は愈々密接なるを認めたり。

氣象。風は北乃至東寄りの風にして北風を最多とし、次で北東、東、南々東の順にて前年の西乃至北寄りの風なりしに比し其趣きを異にせり。漁期間中風向に依る漁獲高の關係は明かならざるも、年に依る最多風位の變化と豊凶との關係あらざるや、尙ほ調査を俟つの要あり。氣温は前年と大差なきも降雪は甚だ多く、初雪は一月十三日にして前年に比し約二十日早く且つ漁期中も雪天多く、古來より云ひ傳ふる降雪と鱧豊凶との關係は強ち根底なきにあらずと認めらる。

(2) 染料の比較

本年度に於ては新規に染料を施したるものを使用せず、二漁期使用後の抗張力を比較する爲め、前年使用のものを其儘繼續使用せり。

但し永世式染網地は已に前年度に於て使用に堪へざるに至れるを以て、之が代りとして同じく前年一漁期(四十日)使用の柿澁染網地を購入補充したり。本網地に就ては前年度報告に何等記載せざるを以て左に別表として掲ぐ。

別表 柿澁染網地本期使用前(一漁期後)の抗張力及伸度表

供試品番號	一	二	三	四	五	六	七	八	九	十	平均
抗張力(貫)	四・四〇〇	四・六〇〇	四・八〇〇	六・〇〇〇	四・九〇〇	四・一〇〇	四・八〇〇	四・八〇〇	四・四〇〇	四・五二〇〇	四・四〇〇
伸度(寸)	三・九寸	三・七	三・五	三・九	三・六	三・二	三・三	三・三	三・一	三・三	三・四六寸

各網地は漁期中交互に半分宛を揚げ乾燥せるを以て、全く海中に在りたる延日數は永保式染料染網地五十六日、油染料及柿
 溢染網地平均六十日間なり。

左に各種染料染網地の抗張力及伸度を表示すべし。

但し供試品の長さ掛目は前年同様長さ一尺四寸五目掛にす(前年度報告比較参照)

第一表 本年一漁期使用後の抗張力表(單位貫)

供試品番號	コイルタール	旗印	胡染料	ネオルシゲン	編高式 (十二本子)	アマタール (十二本子)	ライノンド モーダンド	柿 澁
一	二・〇〇〇	二・一〇〇	二・〇〇〇	一・八〇〇	六・六〇〇	八・五〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
二	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
三	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
四	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
五	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
六	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
七	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
八	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
九	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
十	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・九〇〇	六・六〇〇	八・一〇〇	五・三〇〇	三・二〇〇
平均	二・〇〇〇	二・〇〇〇	二・〇〇〇	一・八五〇	六・二一〇	七・九七〇	五・二一〇	三・一六〇

備考

(イ) ラインドモータンド略式染は本年漁期前水保式染料にて染めなほす
 (ロ) 精製コールタール染は網地の標識不確實なりしに付き省く

第二表 本年一漁期使用後の仲度表(單位寸)

供試品番號	コールタール	旗印	胡染料	ネオルシゲン	彌富式	アマタール	ラインドモータンド	柿澁
一	二・七	二・三	二・四	二・五	五・六	四・二	四・〇	三・五
二	四・一	二・三	二・三	二・八	四・二	四・五	三・八	三・六
三	二・八	二・五	二・〇	二・八	六・七	四・九	三・五	三・八
四	二・六	二・三	二・〇	二・七	四・五	五・〇	四・九	三・六
五	三・三	二・四	二・三	二・六	四・七	四・八	三・一	三・〇
六	三・四	二・六	二・三	三・〇	五・〇	四・八	三・七	三・五
七	三・四	二・五	二・三	二・九	四・六	四・九	三・三	三・五
八	二・九	二・五	二・三	三・四	四・六	四・九	三・九	三・七
九	二・八	二・二	一・九	二・四	五・四	五・〇	三・九	三・四
十	三・八	二・三	二・〇	二・七	五・三	四・六	三・七	三・五
平均	三・一八	二・三三	二・一四	二・七六	四・九六	四・七六	三・六八	三・五〇

第三表

本年使用後の残存抗張力の使用せざる白網の抗張力に對する比率表(十個平均値)

染料別	旗印	胡染料	ネオルシゲン	彌富式	アマタール	ラインドモータンド	柿澁
コールタール	〇・四〇	〇・三三	〇・一七	〇・四〇	〇・四四	〇・四六	〇・三二
クレオソート	〇・三三	〇・二六	〇・一八	〇・三三	〇・三三	〇・三三	〇・二二

右表に依りて各染料を比較し見るに油染料使用のものは概して初年度一漁期使用後は張力著しく強くコールタールクロオン
 ート混合染、胡染料、ネオルシゲン、アマミタール等何れも使用せざる白網に比し、夫れ以上の張力を有したるに第二年目の
 使用にて、急に弱り（保存期間中空氣乾燥の多少影響ありしか）アマミタール及彌富式染料の他は皆半減し旗印、胡染料、ネ
 オルシゲン染は二期の使用にて來年度の用をなさず、ラインドモーダンド畧式染の本年漁期前永保式染料にて染めなほした
 るものは最も残存抗張力を有し、試験染料中第二位にして使用せざる白網に比し七割六分の力を有せり、柿澁染は本期使用
 後の張力中位にあり使用せざる白網の四割八分の抗張力を有するも澁の離脱と共に腐敗早く、本漁期使用前に使用後この張
 力比較より見て來年度の使用には堪へざるものとす。右を要するに鰯網の如き細糸網に對しては油染料を使用する場合其
 種類の選擇につき充分の注意を要し彌富式の如きは比較的柔軟にして水垢の附着も少く残存抗張力も多く防腐劑として良好
 なるも染料高價につき經濟上化學染料を用ひ勞力も要するも時々染替へ乾燥を行ふを最良とすものと認めらる。

(イ) コルク浮子、鐵浮子の効果

コルク浮子鐵浮子の使用個所は別紙網建込圖記載の通りにてコルク浮子は前年長竹四間もの十五本に對して稍浮力不足なる
 を認めたるを以て本年度は本浮子二個を繼ぎて一個として使用せるに充分長竹十五本に相當し取扱ひ取附等容易にして三ヶ
 年以上の堪久年限を有するに於ては竹及鐵浮子に比し經濟的なるを以て引續き堪久試験を行ふ豫定なり、鐵浮子は浮力堪久
 力共竹浮子に比し優り漸次一般定置漁業者の注意する所となり引續き之が試験を行ひ一般に普及せしむる豫定なり（鐵浮子
 コルク浮子の構造價格前年度報告参照）

(ホ) 其他

碇材料に依る碇繋力の比較、網材料の經濟比較等施行の豫定なりしも都合に依り次年度に譲る事とせり。

(土) 收支經濟

本年度鰯角網經營の收支經濟左の如し但し前年残存の漁具材料等にて其儘使用せるものは支出中に算入せず。

收支計算

支出の部

四、三二四、九四^円

内 譯

一、二一九、二八^円

内

一四一、〇〇^円

八〇、〇〇

二八、八〇

一五六、〇〇

三五、六〇

七、一四

二、五〇

二、八五

二、三五九

二二一、一二

三四一、三六

八二、一四

三〇、八〇

三、三八

三六七、三〇^円

内

二五五、〇〇

總支出額

漁具材料代

砂利代

空俵代 (一、四五〇枚)

浮竹代 (六〇本)

綿糸網地代 (一、〇〇〇尋)

染料代

針金代

藁代

碇繩代

綿糸代

藁網代 (三三七丸)

藁打網代 (一一五本)

藁繩代 (八三束)

カツラコ代 (一、四〇〇本)

ロープ代

漁船費

發動機船借入費 (一隻)

六〇、〇〇
 一〇、〇〇〇
 四二、三〇〇
 一、〇二一、五八

内

四、一〇
 九〇七、〇五
 一〇〇、四三
 一、八一六、七八

内

一、一七二、〇〇
 三九五、〇〇
 二〇一、一五
 五〇
 四二、五五
 五、〇〇
 五八
 四、五〇三、八四
 内 譯
 四、四二八、九一

收入の部

漁船借入費 (二隻)
 胴船借入費 (七日分)
 船修繕費
 漁夫給

網卸し人夫賃
 漁夫歩合金 (十一人分)
 漁夫酒肴菓子代
 其他經常費

鰹積取料
 漁場借上代 (取揚ノ八分五厘)
 發動機船燃料其他 (輕油九〇、マシン油七)
 (燈油九罐、ウエス等)
 劑 木 代
 木 炭 代
 ゴムタイヤ代
 燈具修繕費
 總收入金額

鰹三四四舟七山代

七四、九三

柔魚、小鯖等九山代

收支差引の部

一八八、九〇

差引利益金

(三) 附近の一般漁況

本年度能登内浦方面の水溫下降早かりし關係上鱧の來游例年より早く昨年比しては約一ヶ月早し即ち一月下旬既に藤波、羽根、小浦方面角網に弗々漁獲始まり一月末には宇出津、三波附近大半網卸しをなし二月一日迄に宇出津町入津の鱧七百舟に及びたり其後引續き二月上旬中大漁あり一網一日多きは二、三十舟より四、五十舟に及び魚價も低落し一舟(大)十二、三圓に下る同月中旬稍薄く一網一日十舟内外に下り魚体著しく小形なる同月下旬一時大漁ありしも旬末より三月初めに亘り不漁となり三月七、八日より再び濃群襲來し十二、三日迄續き多きは一網一日二、三十舟も揚げたり其後稍衰へ漁獲は斷續的となり普通一日二、三舟より十舟以下にして稀に二十舟内外の漁獲ある網を見る状態にして三月末に及びたるが四月に入りては一層薄漁を來し稀に五、六舟より十舟位の漁獲ある網あるも一般には一舟以下數十貫の漁獲に過ぎず多く四月末を以て切揚げたり五月初め一時魚群の來游あり一網五、六舟乃至十舟の漁獲を見たるも永續せず中羽鱧は全く終漁期に入れり五月中旬一時大羽鱧の漁獲を見一網數百貫乃至二、三舟あり魚價も一尾二厘五毛一舟百圓内外に上りたりしが其後思はしき漁事なかりき。前記の如く本年の角網鱧は來游の早かりしに漁期中殆んど漁獲の切間なく平年以上の豐漁にして漁獲數は昨年三倍せり。雖も魚價著しく低下し漁獲の割合に金額學がらず一網の總漁獲金高少きは三千圓多きも一萬圓普通五千圓程度なりき。

六、海洋調査

鳳至郡宇出津地先に於て周年に亘り月三回(一日、十一日、二十一日)表面、四〇米、八〇米の定置觀測を施行し、又六月五日國立水産試驗場及各府縣水産試驗場と連絡し、日本海一齊調査の爲め能登嶺山岬より北西百裡に至る横斷觀測並に海流堤放流及び嶺山岬地先と宇出津地先に於て潮流板觀測を行へり。各觀測結果左表の如し。(宇出津地先に於ける定置觀測は師大謀網漁期、鱧角網漁期中は毎日觀測を施行せるも各旬初のもののみを揚ぐ)

宇出津地先定置観測表 (潮速は一時間湮ミズ)

月	日	天候	風		水		温		比		潮流	透明度
			風向	風力	表面	四〇米	表面	四〇米	八〇米			
四月	一日	晴	南西	三	九・九	一〇・一	一〇・一	二四二〇	二四四四	二四三九	東 ½	二六
同	十一日	同	北東 ¼ 東	二	一〇・五	一〇・五	一〇・五	二四九六	二四九九	二五〇九	東 ½	二五
同	二十一日	雨	西南西	二	一〇・六	一〇・六	一〇・六	二五一七	二五〇九	二五三三	東 ¼	二四
五月	一日	同	北東	三	一一・〇	一〇・八	一一・六	二四三三	二四二四	二四八三	北東 ¼	二二
同	十一日	晴	東南東	三	一一・五	一一・五	一一・〇	二四八五	二五三三	二五四八	東 ½	二三
同	二十一日	曇	南西	一	一四・九	一四・二	一四・五	二四二〇	二四一六	二四一六	東 ¾	二四
六月	一日	同	東	四	一五・五	一五・八	一五・六	二四三二	二四三三	二四三三	一	二八
同	十一日	晴	東南東	二	一八・八	一七・五	一五・四	二四四五	二四四九	二四四九	東南東 ¼	二二
同	二十一日	曇	北東	四	二二・二	一六・八	一五・七	二四〇一	二四七三	二四八三	南 ¼	二五
七月	一日	同	東	一	二〇・〇	一八・八	一九・八	二四七八	二四四六	二四六六	北 一	二七
同	十一日	晴	西南西	三	二三・五	二二・三	—	二四二〇	—	—	一	—
同	二十一日	同	南	三	二四・二	二四・〇	一八・〇	二四八一	二四五二	二五六一	北々西 ¼	二四
八月	一日	同	南々西	一	二七・五	二四・〇	二〇・〇	二四六〇	二四一四	二四一七	北々東 ¼	二四
同	十一日	同	東南東	一	二七・八	二四・〇	一九・〇	二四三〇	二四〇七	二四三〇	東南東 ¼	二〇
同	二十一日	曇	東南東	二	二六・六	二四・五	二四・五	二四一〇	二四〇〇	二四三六	西 ¼	二四

同	二十一日	曇	北西	三	八・九	九・〇	九・二	二四二六	二四二六	二四二六	二四二六	二四二六	東北東 $\frac{1}{2}$	一三
同	十一月一日	雪	南々東	一	九・三	九・〇	九・一	二五二六	二四八四	二四八四	二四八四	二四八四	東 $\frac{1}{4}$	一五
同	二十一日	晴	南西	一	九・六	九・六	九・六	二五三〇	二五三九	二五三九	二五三九	二五三九	北々東 $\frac{1}{4}$	一五
同	三月一日	曇	北	三	八・九	八・九	九・〇	二五四五	二五四七	二五四七	二五四七	二五四七	南西 $\frac{1}{4}$	二〇

猿山岬北西百裡觀測表 (十月五日施行)

事項	位置	猿山岬	北西	五裡	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同	同
天候	曇	曇	曇	曇	曇	曇	晴	曇	曇	曇	曇	晴	晴	曇	曇	曇	曇	曇
氣温	一七・三	一八・〇	一八・五	一八・八	一九・八	二〇・五	二〇・五	二一・〇	二一・八	二二・八	二三・八	二四・五	二五・二	二六・〇	二六・八	二七・三	二七・三	二八・〇
風向	東	東	北	北東	北東	北東	北東	北東	北東	東北東	—	北東						
風力	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
潮流	—	—	北東 $\frac{1}{2}$	北東 $\frac{1}{2}$	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
透明度	—	110.0米	112.0米	114.0米	116.0米	119.0米	121.0米	123.0米	125.0米	127.0米	130.0米	133.0米	136.0米	139.0米	142.0米	145.0米	148.0米	151.0米
水面	178.8	177.5	177.5	177.1	176.5	176.0	175.7	175.5	175.0	174.7	174.7	174.7	174.7	174.7	174.7	174.7	174.7	174.7
一〇米	179.5	178.5	178.5	178.1	177.5	177.0	176.7	176.5	176.0	175.7	175.7	175.7	175.7	175.7	175.7	175.7	175.7	175.7
二五米	166.8	166.0	166.0	165.9	165.7	165.3	165.3	165.0	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6	164.6
五〇米	132.8	131.1	131.1	130.9	130.0	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7	129.7
一〇〇米	137.7	135.5	135.5	135.8	136.6	137.5	138.6	139.6	140.6	141.6	142.6	143.6	144.6	145.6	146.6	147.6	148.6	149.6

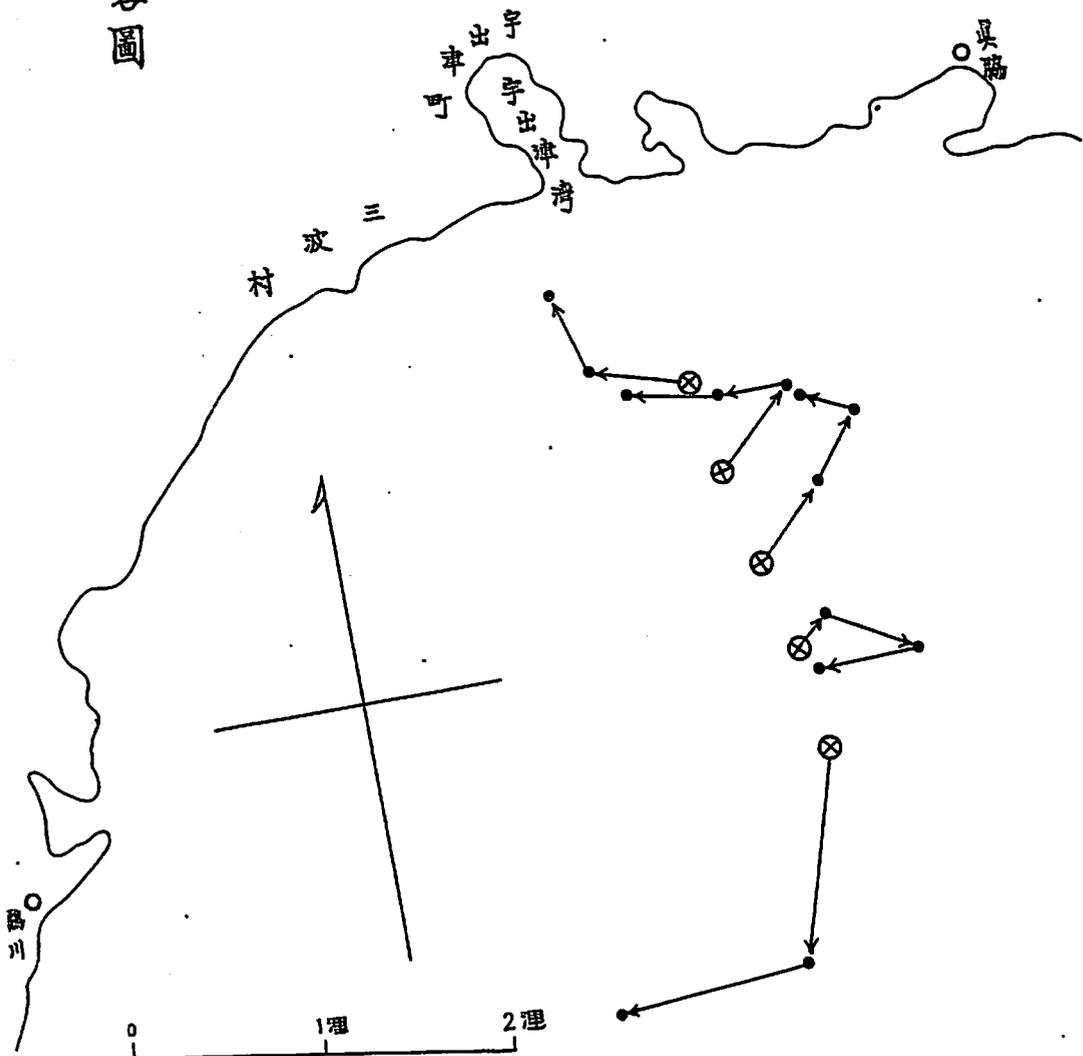
測観回三第			測観回二第		
第一回観測後経過時間	三時間二十四分	三時間二十八分	三時間三十分	三時間三十五分	三時間四十一分
流 向	北西ノ北二分一北	西ノ北	北東二分一東	南東ノ東四分一東	西四分一南
流 程 (湫)	0.6	0.5	0.6	0.9	1.3
一時間平均流速 (湫)	0.11	0.07	0.11	0.12	0.11
第二回観測後経過時間	(第二回ニテ中止)	二時間五十一分	二時間五十分	二時間五十二分	(第二回ニテ中止)
流 向		西ノ北四分三北	北西ノ西	西四分三北	
流 程 (湫)		0.5	0.6	0.5	
一時間平均流速 (湫)		0.18	0.13	0.11	

別紙略圖参照

猿山岬地先潮流板観測表 (六月六日施行)

測観回一第			潮流板番號				
最初投入位置	猿山岬ヨリ北々西 三湫三分	第一號	第二號	第三號	第四號	第五號	
最初投入時刻	午前六時二十三分	午前六時二十六分	午前六時三十分	午前六時三十三分	午前六時三十七分		
投入時刻後経過時間	二時間一分	二時間八分	二時間十分	二時間十三分	二時間十五分		
流 向	北東四分一北	北東二分一北	北東四分三北	北東ノ北	北東ノ北		
流 程 (湫)	1.0	1.8	1.8	1.6	1.6		
一時間平均流速 (湫)	0.16	0.14	0.13	0.11	0.11		

宇出津地先
潮流板観測畧圖



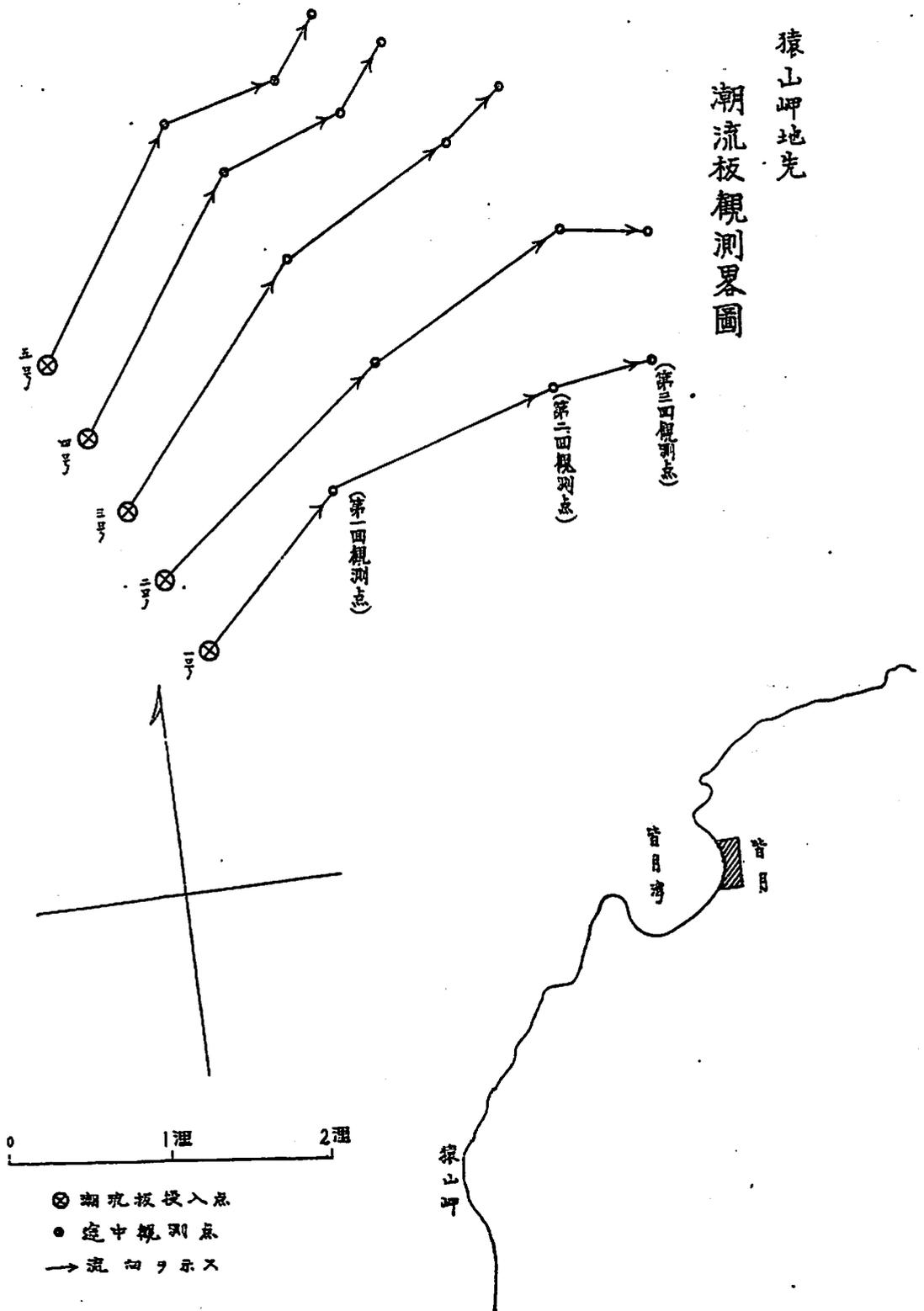
⊗ 潮流板投入点

● 途中観測点

→ 流向ヲ示ス

猿山岬地先

潮流板観測畧圖



0 1里 2里

- ⊗ 潮流板投入点
- 途中観測点
- 流の方向

(二) 通信回数

受信通数	一 鮪	二百四十通	計四百四十三通
發信回数	一 鮪	二百三通	
	一 鮪	八回	計二十一回
	一 鮪	十三回	

(三) 七年度一般漁況海況の概要

大羽鰯流網

四月初の水温は十度前後を示し、昨年比し稍低温なりしも、其後順調に上昇し、加賀方面三月二十五日頃より出漁を始め、四月中旬迄は相當漁獲あり、一隻普通四、五千尾より一、二萬尾多きは四、五萬尾の漁獲を見たるも、大体に水温低く四月下旬十一度を超へず、四月下旬より五月に亘り漸次薄漁に傾き、其後思はしき漁事なく五月中旬より漸く切揚船を見、六月上旬を以て終漁せり。本年漁況は昨年比し稍良好なりしも例年に比し不漁にして一艘の總漁獲高十萬尾乃至二十萬尾を普通とす。

さば延繩、流網

本春水温は四月より順調に上昇せり。雖も、大体に於て低温にして五月初め十二度以下にて、昨年比し一層低く五月上旬能登方面流網に出漁を始めたるも思はしき漁獲なく、一隻十數尾より多きも二、三百尾にして稀に六、七百尾の漁獲あるに過ぎず、五月中旬より延繩も出漁せるが同様漁獲少く、一隻數十尾より二、三百尾に止まる。加賀方面流網は一層の不漁續きにして、六月上旬一時輪島沖にて七、八百尾より一千尾の好漁ありたるのみ。爲めに多くは六月上旬を以て切揚ぐるの狀態なりき。要するに本年漁況は昨年同様不漁に終り、一隻百圓乃至三百圓程度の漁獲なりと觀測せらる。

たら延繩

たら延繩は十二月上旬より能登内浦方面に於て出漁を開始し二月下旬迄從漁せり。此の間水温は昨年比し三、四分位低く畧同様の推移を辿り好況を續け、前年度の豐漁に比し更に一步を進めたる漁なりしも、爲めに價格は二割余の低落を示したり

鮪大謀網

能登内浦大謀網は十月中旬敷設を終り操業に着手せるに、十一月中旬頃より鯽弗々漁獲あり、昨年に比し活況を呈するに至り、十二月初より愈々盛期に入り一月上旬に亘り各漁場共相當漁獲繼續し、特に鹿島郡北大呑村方面に屢々大漁あり、一月中旬よりは一般に終期に入り漁獲減少せるが、本年は概して近年に無き豊漁にして、最高二十萬余圓を擧げ、九ヶ漁場平均五萬九千余圓の水揚を見たり。本漁期中の水温は十一月及び十二月は畧昨年と大差なく、約三、四分、一月初旬約五分程度の低温なりしに過ぎざりしも、海流状態より見て北上する暖流弱く、津輕海峽を通過し去れる寒流其他の迫力優勢なりし結果ならずやと思考せらる。

いわし角網

定置漁具改良試験の一般漁況の項に詳記せり。

小しび竿釣

小しび、小かつを竿釣は能登内浦方面に於て十月下旬より十二月に亘り従漁せらるゝも、本年度は漁獲殆んさなく出漁船もなき状態にて、數年來の豊漁に比し著しき不漁に終れり。

たい延繩

春季四月、五月中は稍豊漁にして一隻四、五貫匁より十貫乃至二十貫多きは三十貫匁の漁ありしが、漸次漁獲減少し七月より八月に亘りては一隻一、二貫匁より十貫匁以下となり、普通八月末頃を以て切揚ぐるもの多し。秋漁は前年に比し反つて薄漁を呈し一隻二、三貫匁より五、六貫匁を普通とせり。

以上を要約するに、本年水温は前年に比し概して低温を示し、春季特に低く、鯽の來游を妨けたる如く、盛夏より初秋に亘りても前年の如く急騰する事なく、従て鯽の如き目醒しき漁事無し。加賀方面延繩は特に不漁を見たり。然るに冬季に至りては水温の下降早く、鰻、鯽等に於て近年に無き好漁獲を見るに至り、特に鯽に於ては十數年振りの漁獲高を示せり。

八、鯽標識放流

本事業は前年來の繼續事業にして、國立水産試験場及各府縣と連絡し鯽の洄游経路を明かにし、以て鯽定置漁業の安定を計る目

的なり。放流要項左の如し。

(一) 標識票 銀製耳搔形 (尾柄に巻く)

① 1~④ 27

(二) 放流月日 放流場所 放流尾數

月	日	天候	風	水温	尾數	放流場所
十二月	二日朝	曇	西三	一六・五	五尾	宇出津漁場
同	三日朝	曇	西二	一六・七	五尾	鳳至郡三波村波並漁場
同	四日朝	雨	北西二	一六・七	五尾	同 藤波漁場
同	八日午後三時	雨	北東二	一六・八	五尾	鹿島郡北大吞村佐々波漁場
同	十三日午後三時	曇	南二	一六・〇	六尾	同 岸端漁場

(三) 八年三月三十一日迄に再捕せられたるもの左の通り。(再捕成績につきては後日取纏の報告すべし)

放流場所	再捕年月日時	再捕尾數	再捕場所
藤波漁場	七年十二月四日 午後二時	一尾	宇出津大謀網漁場
宇出津漁場	八年一月二日 午後	一尾	京都府加佐郡成生師大敷網漁場

九、漁業取締

試験船白山丸の四月より五月に渉る豫定事業は前記の如く能登沖合に於けるイシナギ(オ、イヲ)漁場調査なりしも、當時機船底曳網漁船沿岸小漁業との間に紛争多く放置し難き状態なりしに付、豫定を變更し右期間及他の事業の餘暇に於ても機船、底曳網漁船の違反取締りに従事せり。其の顛末左の如し。

(一) 出勤期間

四月三日より五月廿六日迄及八月七日より同月十日迄

(二) 出動海區

能登外海面より加賀沿岸一帯

(三) 取締狀況

白山丸を以て常に沿岸を巡航監視し機船、底曳網漁船の禁止區域内侵入を防止するに努めたるも、犯則を現認せるもの十一隻は之を検舉し情狀に依り始末書を徴し、又は躰戒の上釋放する等の處理を爲し、警察官署に引渡したるもの一隻ありたり。

以上

製

造

部

一、鯷水煮罐詰製造試験

(一) 試験の趣旨

本縣下沿岸一帯に漁獲せらるる大羽鯷若くは中羽鯷を食品化し、利用更生の道を講ずる目的にて南洋人の嗜好に適する水煮罐詰を製造し、輸出商人をして彼地に試験せしめ販路を開拓せんことを。

従來各府縣に於いて鯷水煮罐詰製造試験を施行したれ共、その使用する所の空罐は何れも一封度楕圓打拔罐の如き高級高價なるものを以つてなせし爲め、生産費の半以上は空罐費に要し、従つて生産費を増大せしめ製品の賣込に非常の苦心をなし、豫期の成績を挙げ得ざりしを本場にては廉價の丸罐を使用して試験を施行し、極力生産費の低減を計んごするものなり。

試験場所 本場内

試験時期 自昭和七年四月七日至四月九日

(四)(三)(二) 試験の方法

製造法

1、原料の處理 魚体を稀薄鹽水にて洗滌したる後、庖丁にて頭部を切斷するに同時に腹部を壓出する様にして内臓を除去し、更らに稀薄鹽水にて魚体を洗滌して筥に揚げ水切を行ふ。

2、鹽漬 洗滌、水切終りたる原料は母氏十五度の食鹽水を満したる半切桶に約二十分間内外(原料の鮮否、魚体の大小、脂肪含有量の多少によりて時間を加減す)浸漬したる後筥に揚げ清水にて洗滌し水切をなして乾燥に移る。

3、乾燥 魚体の水分を除去するに共に、生詰作業を容易ならしむる目的にて乾燥を行ふものにして、晴天にて約一時間内外行ひ魚体の表皮に薄皺のよる程度に止む。

4、肉詰 各種罐型に付き比較試験をなす目的にて、空罐は一封度二號罐、十一オンス、並に一封度楕圓罐の三種類を使用す即ち一封度二號罐には生原料九〇匁、十一オンス罐には七二匁を堅詰しなし、一封度楕圓罐には生原料一三〇匁をトマトサ

1、デン製造の場合の肉詰法と同様に肉詰す。
 5、蒸煮(若くは脱氣) 空罐に肉詰したる儘、蒸煮器に容れ、攝氏九〇度の温度にて二十分間内外蒸煮して脱氣の目的を達する。同時に罐を轉倒して蒸煮によりて滲出したる魚体水分を排除す。
 6、殺菌 一封度二號罐並に一封度楕圓罐は壓力一〇ポンド一時間一〇分、十一オンス罐は六ポンド一時間一〇分。以上の製造法により一封度二號罐、十一オンス罐、一封度楕圓罐各一箱つつ製造して貯藏中に於ける變化状態を試験する。同時に製造中左記の如き數種の基本的調査を施行す。
 A、脱氣後に於ける廢液及油脂量脱氣後に於て生ずる廢液並に油脂量を三種類の罐型につき各五罐つつ測定したる結果は次の如し。

種別	一封度二號罐肉詰量九〇匁	十一オンス罐肉詰量七二匁	一封度楕圓罐肉詰量二三〇匁
一號罐	油液 脂汁 四・三 cc cc	油液 脂汁 四・八 cc cc	油液 脂汁 八・六 cc cc
二號罐	油液 脂汁 四・三 cc cc	油液 脂汁 五・二 cc cc	油液 脂汁 六・六 cc cc
三號罐	油液 脂汁 五・三 cc cc	油液 脂汁 六・四 cc cc	油液 脂汁 七・三 cc cc
四號罐	油液 脂汁 六・三 cc cc	油液 脂汁 六・〇 cc cc	油液 脂汁 七・七 cc cc
五號罐	油液 脂汁 六・三 cc cc	油液 脂汁 六・八 cc cc	油液 脂汁 三・六 cc cc
平均	油液 脂汁 五・四 cc cc	油液 脂汁 五・七 cc cc	油液 脂汁 六・三 cc cc
肉詰量に對する割合			

備考

B、殺菌後に於ける滲出液と固形肉量との割合
 本試験に於いて摂氏九〇度の温度にて二〇分間の蒸発脱氣にて生原料肉詰重量に對し約一〇%より一八%の廢液並に油脂を生じたり。

殺菌後に於いて加熱により滲出したる液汁並に油脂と固形肉の割合を三種類の罐型に付き、各五罐づつ開罐測定せる所次の如き結果を得たり。

1、一封度二號罐の場合

生原料(調理せざる重量二〇匁内外の鰹)肉詰量九〇匁
 脱氣攝氏九〇度二〇分間 殺菌一〇ポンド一時間一〇分

種別	肉詰尾數	固形肉量	液汁量	ヴァキニウム	摘	要
一號罐	七	六八・五 ^匁	二一・〇 ^匁 内液汁三 油脂八 c.c.c	一四・五 ^吋		
二號罐	八	七〇・〇	二一・〇	二三・〇		
三號罐	八	七一・五	二〇・五	二六・〇		
四號罐	七	六九・〇	二〇・〇	二三・〇		
五號罐	八	七一・〇	二一・五	二五・〇		
平均	七・六	七〇・〇	二〇・八	二四・二		
固形肉に對する液汁並に油脂の割合			二七・四 一五・四%			

2、十一オンス罐の場合

生原料(調理せざる重量一一匁内外の鰹)肉詰量七二匁

脱氣攝氏九〇度二〇分間 殺菌時間六ポンド一時間一〇分

種別	肉詰尾數	固形肉量	液汁量	ヴァキユーム	摘	要
一號罐	九	五九・五 ^g	八・五 ^g 内液汁 ^g 三七 油脂 ^g 七 c.c.c	二〇・五 ^分		
二號罐	一〇	六三・五	七・五	二一・〇		
三號罐	八	六一・〇	九・〇	二一・五		
四號罐	九	六二・〇	七・〇	二一・〇		
五號罐	九	六〇・〇	七・〇	二一・〇		
平均	九	六一・二	七・八	二一・二		
固形肉に對する液汁並に油脂の割合						

3. 一封度楕圓罐の場合

生原料(調理せざる重量二八匁内外の鰹)肉詰量一三〇匁
脱氣攝氏九〇度二〇分間 殺菌時間一〇ポンド一時間一〇分

種別	肉詰尾數	固形肉量	液汁量	ヴァキユーム	摘	要
一號罐	九	九七・〇 ^g	一三・〇 ^g 内液汁 ^g 四〇 油脂 ^g 三 c.c.c	五〇・〇 ^分		
二號罐	九	九九・五	一三・五	四〇・〇		
三號罐	九	九八・五	一二・五	四〇・〇		

四號罐	九	100.0	13.0	3.8	4.0
五號罐	九	99.5	14.0	3.4	4.0
平均	均	98.9	13.0	3.6	4.0
固形肉に對する液汁並に油脂の割合			13.1%		

C、脱氣後に於ける魚体の收縮並に重量減少割合

脱氣後に於ける魚体の收縮程度並に重量減少割合を検する目的にて一ポンド二號罐に生原料九尾（此重量八九分二）を詰り、攝氏九〇度に於て二〇分間脱氣したる後、各魚体につき收縮程度並に重量等を測定したる所次の如き結果を得たり。

種別	魚体の脱氣前後			減少割合	魚体の代脱氣前後			減少割合
	脱氣前	脱氣後	減少		脱氣前	脱氣後	減少	
〇號	3.8寸	3.3寸	0.5寸	10.5%	9.2g	8.3g	0.9g	8.8%
一號	3.5寸	3.3寸	0.2寸	6.7%	6.5g	5.9g	0.6g	8.0%
二號	3.8寸	3.3寸	0.5寸	12.1%	10.2g	10.0g	0.2g	3.8%
三號	3.9寸	3.6寸	0.3寸	7.7%	10.0g	9.1g	0.9g	9.0%
四號	3.3寸	3.1寸	0.2寸	10.0%	13.0g	11.7g	1.3g	10.0%
五號	3.8寸	3.6寸	0.2寸	5.3%	8.3g	7.5g	0.8g	9.6%
六號	3.6寸	3.3寸	0.3寸	8.3%	10.1g	9.1g	1.0g	9.9%
七號	4.0寸	3.6寸	0.4寸	7.5%	9.6g	9.0g	0.6g	6.2%

八	號	三・九	三・六	三	七・六	二・三	一〇・三	一・〇	九・〇
合	計					八・三	八・四	七・八	
平	均	三・八四	三・四八	三・六	八・九	九・九	九・〇	〇・九	九・二

D、殺菌後に於ける魚体の收縮並に重量減少割合

殺菌後に於ける魚体の收縮程度並に重量減少割合を検する目的にて一ポンド二號罐に生原料八尾（此重量八六匁八分）を肉詰し、攝氏九〇度に於て二〇分間脱氣したる後一〇ポンド一時間一〇分殺菌して各魚体につき收縮度並に重量等を測定したる所次の如き結果を得たり。

種別	魚体の長さ				魚体の重量			
	殺菌前	殺菌後	減少	減少割合	殺菌前	殺菌後	減少	減少割合
〇	寸分 三・八	寸分 三・二	七分	一・四%	匁分 九・四	匁分 七・七	一・九	二〇・三%
一	三・六	三・三	四	一一・二	一・五	九・二	二・四	二〇・六%
二	三・三	三・〇	三	九・二	九・六	六・九	二・七	二八・〇%
三	三・五	三・二	四	一一・四	一・五	九・二	二・四	二〇・九%
四	三・五	三・三	三	八・六	九・一	七・七	一・四	一五・四%
五	三・四	三・〇	四	一一・八	一・七	九・一	二・六	三三・三%
六	三・八	三・三	六	一五・八	二・三	九・一	三・二	二六・〇%
七	三・九	三・二	八	二〇・五	一・七	九・一	二・六	三三・三%
合	計				八・八	六・六	一・九	二一・三%

平	均	三・六	三・二	五	一三・九	二〇八	八・四	二・五	三・三
---	---	-----	-----	---	------	-----	-----	-----	-----

(五) 試験の結果

製品の製造後六ヶ月にして、開罐内容品を検したる所次の如き結論に達し、大体豫期せる製品を得たるを以つて昭和八年度に於いては、更に進んで經濟試験並に試賣を行ひ販路を見出さんとするものなり。

- 1、開罐後鰯の色澤を検するに脂肪分の少なき魚体は銀白色を呈し、申分無きも脂肪多きものは鈍色、淡黄色を呈し色澤悪し。
- 2、魚体の小なる原料は大なる原料に比較し、概して脂肪少き爲色澤良好なり。
- 3、丸罐詰と楕圓罐詰に於ける鰯の形狀を比較するに前者のもの曲屈ありて形悪し。
- 4、開罐して内容品を取り出す場合、丸罐、楕圓罐共、罐の切り方宜敷ければ、魚体の表皮剝離せず。

一、フィッシュミール製造試験

(一) 試験の趣旨

本縣に於ける魚肥は主として鰯を原料とする、鰯搾粕並に乾鰯(素乾品)にして其の産額年により多少の相違あり。雖、大約一三〇萬貫より一五〇萬貫の間を往來し、從來七五〇餘名の營業者は縣内沿岸沿く散在し四、〇〇〇餘名の日雇男女を使役して其の製造に従事したりしが、最近農家の肥料購入の知識向上したる結果、割安の化學肥料を使用するに至れる爲、魚肥の需要を減じたるに加へ、本年の如きは一般財界の不況に従ひ米價暴落の影響を受け、鰯搾粕は一〇貫圓内外と言ふ下相場を現出し意外の安値の爲め、何れの營業者も收支相償はず之が局面轉換に腐心しつゝある状態なり。

然るに最近業界に是等鰯搾粕を原料としてフィッシュミールを製造し、輸出貿易品たらしめんとする氣運を生じ、縣外各地に於いて其製造業の勃興を見んじするに至れるを以つて、本縣内に於ても斯業奨励上、豫め是が對策を講ずる目的にて、該製造試験を施行し其成績を一般に周知せしめ、之が企業を促し以つて今や行詰むとする本縣業界振興の資に供せんとするものなり。

(二) 試験期日 自昭和七年五月二十三日至五月三十一日

(三) 試験の方法

財界不況の状勢に鑑み、當業者が比較的小資本にて設備し得る方法を採用する爲め、在來の天日乾燥法による鰯搾粕を更に充分乾燥し粉碎機によりて粉碎するに止め、本場内にて左記の通製造試験を爲せり。

使用原料 (中羽鰯) 一〇、三二三貫

搾粕出來高 二、二二三三貫 (原料に對して〇、二二六の歩留)

フイツシユミール出來高 二、一六〇貫 (搾粕に對して〇、九六八の歩留にて、百封度入一八〇袋製造す)

鰯油出來高 (石油罐入) 四三罐

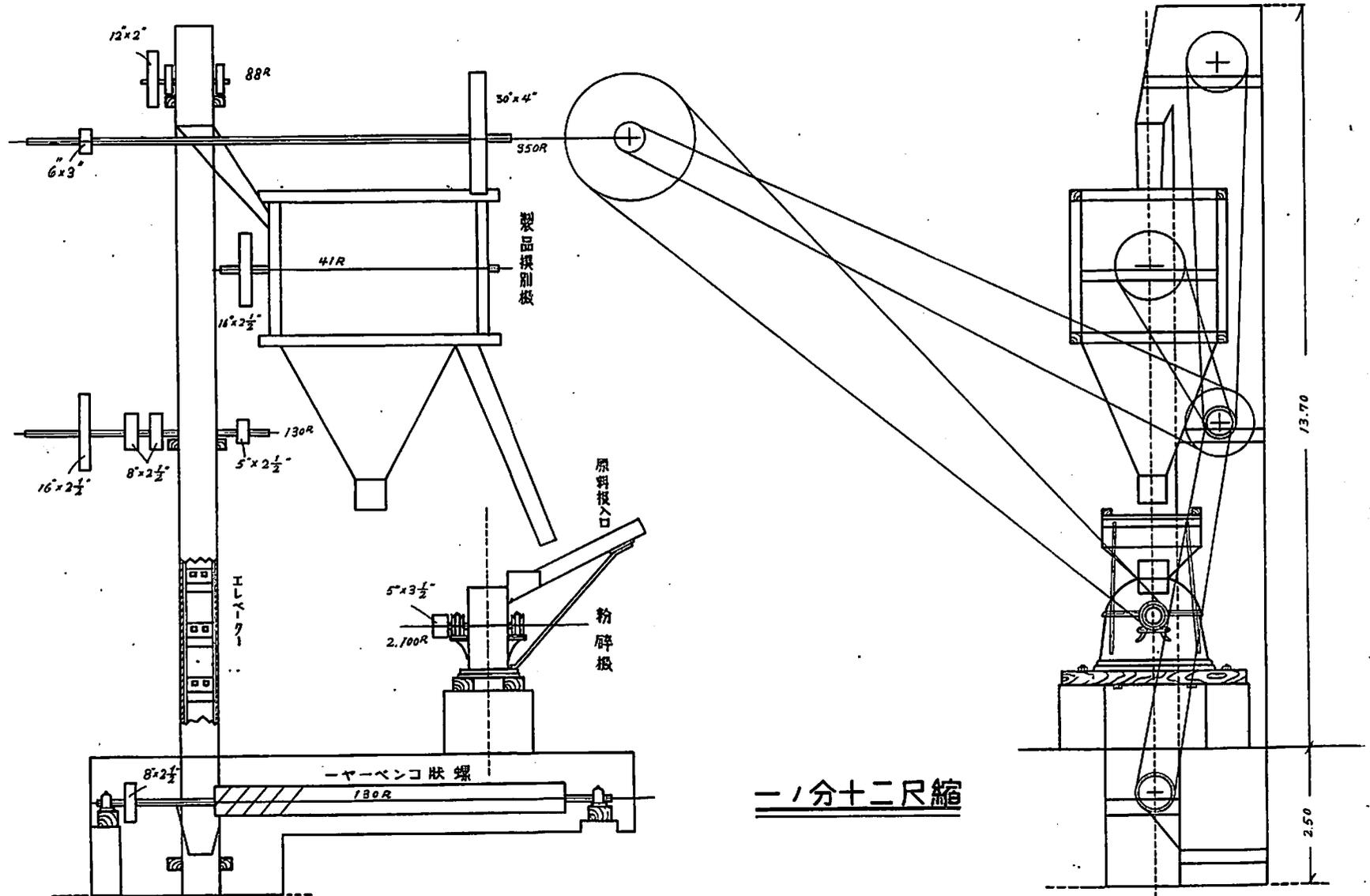
(四) 粉碎機械設備費

一時間製粉能力三〇貫の機械設備費左の知し。

品名	數	量	金額	摘要
粉六碎機	一台		三五,〇〇〇	尾上式三號型
篩機	一台		五,〇〇〇	篩目は一時につき二〇目
送角機	一台		四,〇〇〇	長さ一〇尺
升降機	一台		五,〇〇〇	長さ一六尺
電動機	一台		二〇,〇〇〇	二馬力
傳導裝置	一式		八〇,〇〇〇	ブローラー、ベルト、ハンガー、シャフト其他を含む
据付並に基礎工事計			八〇,〇〇〇	
合計			六八,〇〇〇	

(五) 機械据付圖面、別紙添付の通り
(六) 生産費

石川県産試験場ループル粉砕機据付圖



一日の製粉能力一噸（二七〇貫）としての生産費を計算すれば次の如し。

種別	数量	単價	金額	摘要
中羽鰯搾粕	二八五貫 三枚	一〇貫 一、六〇〇	五、四〇〇 三、六〇〇	普通搾粕より二%丈乾燥を良くし製粉中三、五%は飛散するものとして計算す
麻糸袋	半封度	一、八〇〇	〇、二〇〇	
麻夫	一人	一、〇〇〇	一、〇〇〇	
女夫	一人	五、〇〇〇	五、〇〇〇	
電代	一日分	五、〇〇〇	一、〇〇〇	
雑費計			五、〇〇〇	
合計			二〇、〇〇〇	

備考

- (1) 中羽鰯搾粕一〇貫一圓九〇錢の單價は本年五月本場にて製造せるものの生産費なり。
- (2) 本場所在地より神戸倉庫渡し迄の運賃は一袋に付約三五錢を要す。
- (3) フイツシユミール一〇貫の生産費二圓二二錢餘となる。

(七) 製品の成分

日本魚糧株式會社に於いて米國輸出の爲め、製品の成分を分析したる結果は次の如し。

水分	一〇、七二
窒素全量	一〇、六一
磷酸全量	五、九九
脂肪	六、七七
遊離脂肪酸	三、八七

土砂 〇、八五
鹽分 〇、四六

(八) 試賣の成績

製品一七六袋は日本魚糧株式會社に委託して米國に輸出し、分割試賣せしめたり。

第一回、アメリカ太平洋岸に一〇〇袋(一〇、〇〇〇封度)試賣した成績次の如し。

五米噸 (二〇〇袋)

賣 値 一噸に付米貨二二弗替 代 價 一一〇、〇〇〇弗

日米爲替換算率二七弗四〇仙、邦貨四〇一圓四六錢

諸 掛

倉 敷 料 一、六七圓

上 屋 料 二、五〇

針 屋 賃 〇、五〇

貯 賃 五、〇〇

保 險 料 一、四一

運賃(神戸よりアメリカ迄) 四九、七七

領事證明料 九、二五

分析證明書作成費用 一〇、〇〇

貿易商の手敷料(五分) 二〇、〇〇

合 計 一〇〇、一七

差引手取金 三〇一、二九

第二回、ニューヨーク方面に三六袋分(三、六〇〇封度)試賣したる成績は次の如し。

一、八米噸 (三六袋)

賣 值 一噸に付米貨二七弗替 代 價三九弗六〇仙

日米爲替換算率二一弗一六分ノ一仙、邦貨一八八圓〇二錢

諸 掛

運賃並に保險料其他 五一、二二

米國取扱業者の口錢 二七、四六

合 計 七八、六七

差引手取金 一〇九、三五

第三回、ロスアンゼルス方面に四〇袋(四、〇〇〇封度)試賣したる成績は次の如し。

二米噸 (四〇袋)

賣 值 一噸に付米貨二七弗五仙替 代 價五五弗〇〇仙

日米爲替換算率二八弗〇〇仙 邦貨一九六圓四三錢

諸 掛

輸 入 税 三、五七

埠頭使用料 〇、七五

分析手數料 一三、二二

運送費(埠頭倉庫間) 五、三六

倉敷料(十一ヶ月分) 一一、一四

郵税 其他 三、五七

以上立替金利子(年六分、二四三日分) 一、九六

販賣手數料(賣上の五分) 九、八三

輸出手數料(賣上の一割) 一九、六四

合計 八〇、〇三

差引手取金 一一六、四〇

以上三回分の一袋(約十二貫)當、平均手取金を算出するに二圓九九錢五弱にして、更に之を十貫建に直せば二圓四九錢餘となり、先きに掲げたる十貫當生産費と比較するに二七錢の利益を見る。

然れども前表に見る如く、實情は賣値の高低よりも爲替相場の變動に依る影響甚しく、今日に於ては事業としての確否を明言し得ざるを遺憾とす。

三、製造講習並に指導

(一) 雜節改良製造講習

目的、小鮎並に惣太鯨の所謂雜節製品を一般市場向に改良して品質價格を向上せしめ、當業者の利益増進を期せんとするものなり。

1、講習場所 羽咋郡西海村字風戸

2、講習期日 自昭和七年七月五日至七月二十五日 三週間

3、講習科目及擔當講師

鯨節製造法 石川縣農林技手 八島與信

同 實習 石川縣水産試験場助手 東崎行雄

同 清水市築地町一三五 眞野金太郎

4、受講者 主として西海村の當業者一三名なれ共、成績優秀にして技術修得證書を授與せるもの次の七名なり。

羽咋郡西海村字風戸

同 加能 重平
加能 重次郎

(二)

指導

同 同 同 同 同

市川 潔
小川 淺七
大庭 喜平
端谷 清吉
大間 傳次郎

1、養鶏川貝殻粉碎の指導、昭和七年五月三十一日鳳至郡宇出津町關本喜八氏に對し、本場備付魚粕粉碎機を利用して養鶏川飼料貝殻粉碎の指導を行ふ。

2、雑節製造並に濕乾室建設の指導、昭和七年七月二十六日鳳至郡黒島村玉谷澁方へ技術者を出張せしめ、雑節製造並に濕乾室建築に關する指導を行ふ。

3、鮎甘露煮製造の指導、昭和八年一月十四日羽咋郡越路野村字千路に於いて、同地當業者並に水産補習學校生徒の爲め、鮎甘露煮製造の指導を行ふ。

4、松風鱈製造の指導、昭和八年自三月一日至同月五日間宇出津實業中等學校生徒の爲め、本場内に於いて松風鱈製造の實地指導を行ふ。

5、トマトサーデン製造の指導、昭和八年二月二十日より、當場製造工場並に諸設備を珠洲郡正院村原政吉氏に貸與し、トマトサーデンの製造指導を行ひ、漁期終了迄に約二、五〇〇函の罐詰を製造せしめたり。

附

錄

一、昭和七年度決算表

項目 名	業務別	漁		製		造		計											
		白山丸	各種漁 調査	海 洋 観 測	定置漁 具改良 試験	調査費	計		鮭水 煮 結 製 試験	シフ ユイ ツ 製 造 試験	節類 製 造 試験	並製 鮭 製 造 試験	化学分 析 試験	計					
六 水産試験 場費	18,000.00	18,000.00																	
一 俸給	5,110.00																		5,110.00
一 俸給師	1,150.00																		1,150.00
二 俸給手	1,000.00																		1,000.00
三 主事給	2,200.00																		2,200.00
二 雜給	3,760.00																		3,760.00
一 諸備給	11,000.00																		11,000.00
雇員	5,100.00																		5,100.00
助手	5,000.00																		5,000.00

業務別 歳入決算	七、〇九一・七	四、九四四・六三	九五三・六四	五、九〇七・二六	六八八・八六	三四九・七五	二、二七八・六二	六・二〇
二指定 修繕費	一七九・三三							一七九・三三

二、昭和七年度末現在本場員氏名擔任表

事務擔當別	官職	氏名	摘	要
場長	農林技師	小林章之	七年六月二十八日前任者吉田潔ト交代ス	
漁撈係主任	農林技師	片山年		
製造係主任	農林技手	八島與信		
漁撈係	農林技手	寛博		
會計及庶務係主任	農林主事補	川畑彌三吉	七年七月五日前任者廣田龜吉退職ノ後ヲ享ク	
會計及庶務係	雇	北野重雄		
製造係	助手	東崎行雄		
漁撈係	白山丸船長	北久次郎		
同	白山丸機關長	渡久雄		
同	無線電僑士	大出豊		
輪島無線電信所主任	同	新井末太郎		
船倉島無線電信所主任	同	小川武雄		

昭和九年三月廿五日印刷
昭和九年三月卅一日發行

鳳至郡宇出津町

發行所 石川縣水產試驗場

金澤市博勞町七四

印刷者 向井伊三郎

金澤市博勞町七四

印刷所 向井經業堂